

---

# 退屈な人生をやりなおせ！

エディル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

退屈な人生をやりなおせ！

### 【Nコード】

N4945T

### 【作者名】

エディル

### 【あらすじ】

少年は今の生活に退屈していた。毎日同じことの繰り返しに飽き飽きしていた「刺激が欲しい」そんな少年は不慮の事故で死んでしまう。「え？転生させてくれるの？しかもオマケ付き？」少年の望みは思いもよらない形で叶うことになった。

作者は厨二病患者です。しかも思いつきで書き始めたため、最終的

にはどうなるか作者にも不明という状態です。なのでご都合主義や原作改変も入って来るかも知れません。おそらく更新不定期。ヒロインは…誰になるんだろうなあ。

## 初めに

みなさん初めまして。

今回このSSを書かせていただくエディルと申します。

まず最初に、この作品は作者の処女作です。

「ここおかしくね?」「このキャラこんなしゃべり方だっけ?」「など、おかしなところもあると思いますが温かい目で見てやってください。

次に、この作品にはオリ主が登場しますが、ハッキリ言ってチートです。

さらにゼロの使い魔以外の魔法なども登場しますが、作者の独自解釈なども混じってますが、ご容赦ください。

文才0を超えてマイナスに入ってる駄作者ですが、楽しんでいただけるよう頑張りますのでよろしくお願いします!

**オリ主プロフィール（11月7日）（前書き）**

オリ主のステータスなど

話が進んで追加されることがあります。

11月7日：追加しました

## オリ主プロフィール（11月7日）

オリ主プロフィールです。

能力や魔法などについて書いていきたいと思います！

名前：佐上義人

さがみ よしと

年齢：17才

身長：175cm

体重：60kg

見た目：茶髪で短め。ワックスを使わなくても髪が立つくらい短い  
が、ボウズではない。

服装は前世で通っていた学校の制服。よくある黒の学ラン。  
学ランの第二ボタンまで開けて着崩している。

性格：あまり気が長い方ではない。前世にいた頃はよくケンカなどもしていた。

だが、あくまで売られたケンカを買うという形でのケンカで、

自分からは売らなかつた。

しかし、ケンカをしていたのは事実なので、周りからは一線ひかれていて、仲間も少なかつた

そのためか、仲間に対しては非常に優しい。

そしてアニメやマンガ、ラノベを好んでおり、一般的にオタクと言われる部類に入るのだが、周りにはそんな事を話す相手もおらず、見た目がそれなりに良かったため周りはそれに気づいていなかった。

スキル：投影魔術

ネギまに登場する魔法（本編ではまだ使用していないのでどこまで使えるか不明）

ゼロの使い魔に登場する魔法の才能（スクウェアクラスになれる程度。系統は不明）

魔力無限

身体能力の上限無し（あくまで上限が無いだけ。強くなるには鍛えるしかない）

ゲートオブバビロン（中身は空。あくまで倉庫である）

咸卦法

なぜ使用できたのかは不明

（第四話の時点ではまだ体を鍛え始めていないため、身体能力は普通）

オリ主プロフィール（11月7日）（後書き）

以上です！

あまり書いた意味を見出せなかったり…

## プロローグ1（前書き）

作者の初投稿です。

## プロローグ1

学校の帰り道。

いつもと同じ1日が今日も終わりを迎える。

「……つまんねえ」

毎日学校に行つて授業を受けて帰る。休みの日も、アニメ見たりラノベやマンガを読んだりして1日が終わる。

ハッキリ言つてつまらない。

同じことを繰り返し、いずれは卒業、就職。社会の歯車としてずっと同じことを繰り返して行く。

こんな人生を送つてオレは死んでいくのか…と、溜息をつきながら家までの道を歩く。

一体何度この道を歩いたのか。何度この道を歩きながら、同じことを考えたのか。

一応オレは高校2年生だ。

オレの通つてる高校は本当に普通。就職する者もいれば進学する者もいる。

来年に向けて、そろそろ自分の進路をマジメに考えなくてはならないのだが、そんな気分にはなれない。

今オレが考えてるのは『刺激が欲しい』ということだ。

何かこのつまらない日常を吹っ飛ばすような出来事は無いのか。

???。「まあ、そんなことあるわけないか。……ん？」

いきなりドガンという大きな音とキキーツという音。

???。「なんだ、事故か?…っつて、え!？」

乗用車とトラックの衝突事故がその音の正体だった。だが予想外の事が起こる。

( (なんでこっちに車が来る!?) )

衝突したトラックが自分の方に向かって突っ込んでくる。ブレーキをかけているようだが間に合わない。

( (待てよオイ!?!いくら刺激が欲しいって言ったってこんな望んでねえぞ!?) )

( (マズイ!避けらr…!) )

ドゴン、ボキバキグシャ

自分の体から鳴ってはならないような音がしているのを聞き、オレは意識を手放した。

「????」 望みを叶えてやるよ。 退屈だなんて言えない人生をくれてやる。」

## プロローグ2（前書き）

プロローグ2です。

次話から本編に入ります。

## プロローグ2

真っ白な空間で????は目覚めた。

????。「…ん？」

頭がぼーっとする。

それに何だ？体が浮いてるような感じがする。

????。「起きたか。」

突然、後ろから声をかけられ振り向くと、黒の短髪でオールバックにしている20代くらいの男が立っていた。

????。「あんた誰？」

すると男はニヤツと笑いながら

????。「オレは管理者だよ、世界のな。」

とか、言いだした。

何だこいつ？頭のネジが3本くらいぶっ飛んでんのか？

管理者「ぶっ飛んでねえよ。むしろぶっ飛んだのはお前だろうが。」

何を言ってるんだこいつは？まあそれ以上に言いたいことがある。

「……誰の頭がぶっ飛んでるだコラア！！初対面で失礼すぎねえか！？」

心を読まれた？どうでもいい。いきなり人の事をぶっ飛んでるとか失礼すぎる。

管理者「いや、どうでも良くないだろ。むしろそっちの方が重要じゃね？しかもオレ頭がぶっ飛んでるなんて言っていないぞ。」

は？頭じゃなかったらなんなんだよ

管理者「とりあえずお前さ。ここに来る前の事覚えてるか？」

「……ここって……この白い空間だよな？どうやって来たのかもわからないんだが、確か……」

「……？」「オレは下校途中に……あっ」

「……そうだ、乗用車にぶつかったトラックがそのままオレに突っ込んできたんだ。」

「……？」「……ってことは、オレは死んだってことか」

よく思い出してみれば、オレの体からとんでもない音が鳴ったしな。

「……そっか……死んだか。」

「……？」「……んで、オレはこれからどうなるんだ？」

管理者「何だ、泣いたり発狂したりしねえのか？」

まあ両親には産んでもらったのに申し訳ないって気持ちはあるけど、それでもオレは退屈してた。

「???」「あのまま生きててもやりたいことなんか無かったし、未練はねえよ。両親がちょっと気になるが。」

管理者「そうか。まあ、それがわかってたからここに連れてきたんだけどな。」

「???」「は？どついうことだよ」

管理者「お前は本来まだ生きてるはずだったんだよ。あの事故で死者は出ないはずだったんだ。」

「ちょっと待てよ…。じゃあなんでオレ死んだんだよ…？」

管理者「お前退屈してただろ？だから退屈しない人生をやるうと思つてな。そのために一回死んでもらったんだよ。」

「退屈しない人生ってどうゆうことだ？オレは死んだんじゃないのか？」

管理者「ようするに転生つてやつだよ。お前2次小説だっけか？そんなん読んでただろ？その設定によくある転生つてやつだよ。」

「???」「はあ！？転生！？マジで！？そんなん現実であんのかよ！  
!！」

管理者「あるからここにいるんだろ。さて、本題に入るが…お前どこの世界に転生したい？」

「???「あれ？2次小説とかだと行ける世界って決まっていたり、クジ引きだったりするんじゃないの??」

管理者「まあオレが決めても問題ないんだがな。どうせなら自分で決めた世界に行きたいだろ？それに、オレはお前に退屈しない人生をくれてやるって言ったんだ。オレが決めちゃ退屈するかしらないかわからねえだろ？」

結構前がいいな。まあ行きたい世界と言えばあそこだよな。

「???「ゼロの使い魔。あの世界に行きたい。」

魔法とかあつた方が面白そうじゃん！

管理者「りょーかいつと。んで、他には？」

「???「他にはって？」

管理者「欲しい能力とかねーの？色々つけてやるぜ。個数制限無しだ」

MA ZI DE! ?なら遠慮なく…

「???「とりあえず生まれを貴族にしてくれ。原作キャラと絡みたいしな。外見は普通よりちよい上で。能力は魔力無限、身体能力の上限無し。ゼロの使い魔の魔法の才能はスクウェアクラスになれる程度。ネギまの魔法と投影魔術使ってみたいな。あとはゲートオブバビロン欲しいな。あ、中身は投影で作るからいいや。倉庫的な役割で欲しい。とりあえずこんなもんか。」

ちと欲張り過ぎかね？まあ貰えるもんは貰っておきたいしな。

管理者「ホントに遠慮ねえな。お前一人で戦争でもする気かよ？ああ、ちなみに使い魔として召喚させるから生まれは無理だ。」

???「それって転生って言わなくね？」

管理者「一応転生だな、お前一度死んでるし。それに、赤ん坊からやり直すとゼロの使い魔以外の魔法使えないぞ？使ったら即異端審問だ。使い魔としてずっと遠くから召喚されたから違う魔法が使えるんだってことにしろ。」

???「じゃあゼロの使い魔の魔法の才能は？」

管理者「オレが付けるのは才能だ。つまり転生したばっかだとゼロの使い魔の魔法は使えないが、お前が自分で習得していくことは可能だって訳だ。」

まあしょうがないか。異端審問なんかされたくねーし……あつ、そうだ。

???「だつたら、使い魔にかかる…洗脳か？あの主人に忠実になる的なやつ。あれ無くしてくれよ。」

オレは自由にやりたいからな。特に洗脳なんてもんはまっぴら御免だ。

管理者「ああ、あれか。わかった消しておいてやる。さて、これで良かったら向こうの世界に…」

あ、そうだ

「……ちょっと待ってくれ。最後に一つ頼みがあるんだ。」

管理者「ん？まだ追加するのがあるのか？」

「……いや…元の世界でオレの存在って消せねえかな？」

確かにオレは退屈してた。それでも産んで、育ててくれた両親には感謝してる。だから…

「……オレは両親を悲しませたくねえんだ。」

管理者「…本当にいいのか？お前の事忘れられちまうんだぜ？」

それでもいい。悲しませたくねえんだ。

管理者「わかった。オレは世界の管理者だからな。そのくらいは出来るぜ。」

「……悪いな。頼むわ。」

管理者「それじゃ、向こうの扉を開けな。そしたら転生完了だ。」

そう言うと、何も無かった真っ白な空間に扉が一つ現れた。

「……ありがとな！じゃあ行ってくる。あ、それから…」

扉に向かって歩きながら管理者に声をかける。

管理者「ん？まだなんかあんのか？」

「???」「なんでオレを転生させてくれるんだ？わざわざ能力までつけてくれて。」

そう言うと管理者は笑いながらこう答えた。

管理者「オレもお前と同じで退屈してたんだよ。だからお前を転生させて、その世界がどうなるのを見てみようと思った。ようは暇つぶしさ。」

そんなことで殺したのかよ…。まあ、いいけどさ。

「???」「んじゃ、せいぜい面白く生きてやるさ。お前が笑い死ぬくらいにな。」

そしてオレは異世界への扉を開けた。

新しい、最高に面白い人生を求めて。

## 第一話（前書き）

さあハルケギニアにやって参りました！

## 第一話

扉を開けたら眩しい光がオレを襲った。そしてその直後…

ドゴーン!!!

???「!?!」

もの凄い爆発が起きた。目の前真っ黒?茶色?ぶえっ!砂が口に入  
った!

そして煙が晴れていくとそこには…

?「あんた誰?」

桃色の髪をした少女がこつちを睨むように見ていた。

ああ、転生したんだな。

最初の感想はそれだった。

ルイズに召喚されたってことは、まさかオレがサイトの代わりにな  
ったのか?

ルイズ「ねえちょっと!聞いているの!?!」

???「ん?ああ、すまん。なんか状況が良く分からなくてな…!?!」

とりあえず惚けておく。原作知識に関しては言わない方がいいだろうしな。

ルイズ「ミスタ・コルベール！」

コルベール「なんだね。ミス・ヴァリエール。」

コルベール「ってあのガソリン錬金した人だっけ？原作知識うる覚えだっけりするんだよなあ…」

ルイズ「あの！もう1回召喚させてください！」

それ召喚された本人の前で言うことじゃないよなあ…

コルベール「それはダメだ。ミス・ヴァリエール。」

ルイズ「どうしてですか!？」

コルベール「使い魔召喚の儀式は神聖なものだ。それをやり直すなご儀式に対する冒涇ですぞ？彼を使い魔にするしかない。」

おおー。さすが先生だ、しっかりしてるぜ！けどオレの人権は一体どこに？ああ、平民に人権なんかありませんでしたね…。

ルイズ「でも平民を使い魔になんて…聞いたことありません！」

そりゃないだろうさ…。

コルベール「これは伝統なんだ。例外は認められない。彼は…確かに平民かもしれないが、使い魔召喚の儀式のルールはあらゆるル―

ルに優先する。彼に使い魔になつてもらつしかない。」

ルイズ「そんな…。」

がつくりと肩を落とすルイズ。そりゃそうか、せつかく呼び出した使い魔が平民じゃあな…。

コルベール「さあ、早く契約をしなさい。次の授業が始まってしま  
う。」

周りから「そうだそうだ！」とヤジが飛ぶ

そしてルイズはこつちを向いて

ルイズ「あんだ…。」

???「ん？」

やっと話しかけられた。ちょい空気になつてたしな。

ルイズ「感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通  
一生ないんだから。」

は？召喚されたことをか？だったらオレは管理者に感謝するね。

あれ…？そういえばこの後は…。

ルイズ「ん…。」

???「んぐう！？」

そうだったあああああ！！！！！！契約でキスされるんだったあああああ！！！！！！オレのファーストキスが何の前触れもなく奪われたよorz

いや、オレが忘れてただけなんだけどな…。

ルイズ「終わりました。」

顔が真っ赤になってる。多分オレも真っ赤だろうな…。うつわ恥ずっ！！

コルベール「うん、コントラクト・サーヴァントは一回で成功したようだね。」

コルベールがそう言うと、オレの左手がいきなり熱くなった。

????「熱っ!?!」

ルイズ「すぐ終わるわよ。待ってなさい、今使い魔のルーンが刻まれているところだから。」

????「ゲツ…」

これ結構ヤバいって!?!タバコ押しつけられたみたいに痛いぞ!いや、やられたことねえけどさ。

????「はあはあ…。」

やっと痛みがひいたぜ。もう嫌だなこれは…。

そう思っているとコルベールが????の左手を握り

コルベール「ふむ、珍しいルーンですな。少し調べてみましょう。」

そう言ってるルーンのスケッチをした。まあ左手に現れたからガンダールブなんだろうな。

ってことは、この世界にサイトは登場しないのか…。

コルベール「さて、それじゃあみんな、教室に戻るぞ。」

そう言うとコルベールは宙に浮いた。他の生徒も後を追うように宙へ浮く。

すげえ。マジで人が飛んでるぜ…。

生徒「ルイズ！お前は歩いて来いよ！フライはおるか、レビテーシヨンも使えないんだから！」

そして他の生徒たちもそれを聞き、ルイズを笑いながら飛んで行った。

原作知識あるからわかってたけど、ホント貴族って性格悪いなあ。履歴書の趣味の欄に人を見下すことって書けるんじゃないか？

なんてことを考えていたらルイズがこっちを向いて

ルイズ「あんた何なのよ!？」

怒鳴られた…。何なのよと言われても…。

???「人間。たった今使い魔になったけどな。」

ルイズ「あんたふざけてんの？私が聞いているのは、あんたがどこの誰かってことよー!」

名乗ればいいのか？

???「そーいや、まだ名乗って無かったな。オレは佐上義人。日本って国から来た。」

ルイズ「サガミヨシト？ニホン？聞いたことないわ、どこの田舎よ…。」

こっちの方が田舎だろうって言葉は飲み込んでおく。言っても信じそうにねえからなあ…。

義人「それで、ここはどこなんだ？」

知ってるけど一応聞いとかないと怪しまれそうだしな。

ルイズ「ここはトリスティンよ。で、あそこがかの高名なトリスティン魔法学院。」

「そして私は2年のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。今日からあんたのご主人様よ。覚えておきなさい!」

そうか…。

オレはホントにゼロの使い魔の世界に来たんだな。

第一話（後書き）

やっと主人公の名前が出せました（笑）

## 第二話（前書き）

なんか無理やりな気が…。

## 第二話

ルイズ「それで、あんたは何ができるの？」

義人「何がと言うと？」

今は既に夜。ルイズの自室で色々説明していたところだ。

とりあえずオレの出身はとにかく遠いところだと説明した。

今までハルケギニアという名前は聞いたことが無い。おそらく全く交流が無かったくらいに遠い地なんだろう…と。

そう説明すると、ロバ・アル・カイリエ（東の方）だったっけ？この出身じゃないかと言われた。

確か設定だと、ハルケギニアは中世ヨーロッパがモデルだったよな。

とりあえず、その出身かもしれないと伝えた。

まあ日本だからな。今後もそう名乗らせてもらおう。確かサイトもそうゆう事にしてたしな。

そして出身地の話が一段落すると、冒頭のようになったというわけだ。

ルイズ「使い魔は主人の目となり耳となる能力が与えられるの。でも私には何も見えないわ。」

つまりオレが見たり聞いたりしたものが、ルイズにも見えたり聞いたりするってわけか。

ルイズ「それから使い魔は主人が望むものを見つけてくるのよ。」

義人「ふーん。じゃあお前は何が欲しいんだ？」

ルイズ「そうね…たとえば秘薬とかね。硫黄とか、コケとか。特定の魔法を使う時の触媒になるものね。これは出来る？」

硫黄なら温泉がありそうなところ探せば見つかるか？コケは川とかにありそうだし。けど他のはわかんないな。どんな触媒が存在するのかを知らないオレが見つけて来れるはずが無い。

義人「まず秘薬がわからないから無理そうだな。」

ルイズ「そう。まあ期待してなかったわ。」

だろっな、態度が完全に見下してるからな。

原作知識なかったらキレてるレベルだぜこれ。

ルイズ「そして、これが一番なんだけど……、使い魔は主人を守る存在であるのよ！でも、あんたじゃ無理そうね。平民だし。」

んー、管理者からもらった能力を使えば守れそうだけだな。とりあ

えず能力の確認がしたいな。

確認できるまでルイズに話すのはやめておこう。余計なこと言われ  
ても面倒だ。

義人「まあ今まで殴り合いのケンカくらいしかしたこと無いしな。  
メイジに勝てるとは思わねえ。」

ルイズ「はあ、なんでこんな召喚しちゃったのかしら…。こんな  
何もできない奴を…。」

なんかガツクリしながらぶつぶつ言ってるし。ってかサイトってホ  
ント理不尽な目にあってきたんだな。

オレは望んでここに来たが、サイトの場合は完全に拉致みたいなも  
んだ。

拉致されて奴隷にされたって感じだったんだらうな。

その上このセリフだ。たまったもんじゃないだらう。

ルイズ「とりあえず、あなたには雑用をやってもらうわ。掃除洗濯  
その他雑用よ。」

義人「了解だ。」

まあこうなるのはわかってたんだし、へ夕に抵抗する必要もないよ  
な。

ルイズ「さてと、喋ったら眠くなっちゃったわ。」

義人「オレはどこで寝ればいいんだ？」

ルイズは床を指さした。ホントに人間だと思われてなさそうだな…。

この時代の平民じゃこんなもん…いや、マシな方が。外で寝ろって  
言われただけいい。

でも…

義人「起きたら背中痛くなりそうだな」

起きたら背中がバキバキツっていいそうだな。

ルイズ「仕方ないでしょ。ベッド一つしかないんだから。」

ルイズは毛布を一枚投げてきた。まあ毛布があれば多少マシか。

そう思っているとルイズは服を脱いでいく。

何やってんだと言いそうになるが、そこでふと思い出す。

今のオレは使い魔だから、男どころか人間だとすら思われてない。

いくらなんでもオスの犬や猫に裸を見られて恥ずかしがる女子はい  
ないだろう。それと同じ扱いなんだ。

( (ホント、ひでえ扱いだな…) )

この扱いからあそこまで改善させたサイトはホントにすごいと思う

しかない…。

ルイズ「これ、明日洗濯しておいて。」

そう言っただけで投げ渡されたのはルイズの下着だった。

何度でも言おう。扱いがひどい…。

なんか10秒ごとにそれを確認させられてる気がする。

義人「りょーかい…。」

とりあえず今は言うこと聞いておこう。

ルイズ「それじゃ、寝るわよ。」

ルイズがパチンと指を鳴らすとランプの灯が消える。

オレも毛布に包まって床に寝転がる。

そして寝転がりながら今後の事を考えていた。

( (確か、次に起こるのはギーシュとの決闘だったかな。 ) )

確か原作だと、サイトにボコされた後はいい奴だったけど、それ以前はクズだったなあ。

根はいい奴みたいだし、やっぱり決闘フラグ回収して仲間にしておくか？

( (その次が：フーケだったか？ん〜、フーケはどうしようか…) )  
実際ティファニアたちの為に泥棒やってるだけだしな。ティファニアと一緒に助けてみるか？

( (そのあとにアルビオン、レコン・キスタと戦争……だめだ、ハッキリとは思いだせない。) )

まあ、なにか起こった時に思いだせるだろ。と、楽観的な考えをしながら義人は眠りについた。

## 第二話（後書き）

フーケどうしようかな。

### 第三話（前書き）

作「先生…文才が…文才が欲しいです…」

義人「無理だ、諦める。」

作「いや、そんなバツサリ切るなよ…」

## 第三話

皆さんおはよう。

昨日ルイズに召喚された佐上義人だ。

人によつてはこんにちわやこんばんわかもしれないが、オレは今起きたのでおはようとあいさつさせてもらう。

あいさつは基本だぜ。

とりあえず状況を説明しよう。

床で寝てた 起きた。

以上だ、詳しくは前話を読んでくれ。まあ作者に文才が無いからそれでもわかんないかもしれないけどな。とりあえず……

義人「ルイズを起こすか。」

窓から朝日が差し込んで結構眩しい。

今何時くらいなんだろうか…。

日の高さからして多分7時くらいなんじゃないかと思つが…。

義人「ほら、起きろよ。ご主人様。」

ベッドで寝ているルイズを起こす。

つてか母親以外の女性の寝顔を見るのは初めてかもしれない。

結構可愛い顔してるんだよな。性格があれだけど。

まあ平民相手じゃみんなこんな感じなのかな？

起こしながらそんなことを考えていると、ルイズが起きたようだ。

ルイズ「ふあゝ……………もう朝か、つて誰よあんた!？」

寝ぼけた顔であくびをしていたが、オレの顔を見たときたん驚いたよ  
うな顔をして怒鳴って来る。

寝ぼけてるだけだよな？忘れるほどバカじゃないと思うんだが…

義人「昨日お前に召喚された使い魔だよ、ご主人様。」

するとルイズは目をパチパチさせたあと、ようやく思い出したのか

ルイズ「ああ、そつか。私、昨日召喚したんだっけ…。」

なんかすっげえ落ち込まれたんですけど？そりゃ望んでないのはわか  
かってるけど、目の前で落ち込まれるとなあ…

ルイズ「とりあえず服とつて。」

そう義人に命じる。

服ってこの椅子にかかっているやつでいいのか？と思いつながらその服をルイズに渡す。

そうするとダルそうにネグリジユを脱ぎながら

ルイズ「あと下着も」。

とか言ってきた。

下着！？いやさすがにそれくらい自分でやれよ！？いくら使い魔でもそこまでしねえだろ！？

義人「さすがに下着くらいは自分でやってくれないか…？」

さすがに下着は恥ずかしい。オレが…！

ルイズ「その〜クローゼットの一番下の引き出しに入ってるわ」。

「

オレの小さな願いは碎け散った。

渋々引き出しを開けると下着が入っていた。

勘弁してくれよ…。いくらなんでもここまでさせなくても…。

義人は基本沸点が低い。要するに短気なのだ。だが今は怒りよりも羞恥心が遙かに上回っているため、顔を真っ赤にしながら早く着替えを済ませて欲しいと願っていた。

とりあえず適当に下着をルイズに渡して後ろを向いていると

ルイズ「服着させて。」

またもや義人の願いは砕け散った。

義人は仮にも17才。ルイズと年の差はほとんどない。同年代の女子の下着を取ってやり、さらに着替えさせるなど恥ずかしいどころじゃない。

人によつてはご褒美だろうが、義人は普通の男子高校生だったのだ。

義人は顔を真っ赤にさせながら

義人「着換えくらい自分でできんだろ？」

と、出来るだけ冷静に言う。

実際、心の中では恥ずかしすぎて逃げ出したい気持ちでいっぱいだが、なんとか耐えていた。

ルイズ「貴族は下僕がいるときは自分で服なんて着ないのよ。」

貴族ってただの怠け者のことなんじゃねえか？と、思いながらも義人はルイズに服を着せてやった。

着替えが終わり、ルイズと部屋を出ると、それと同時に近くの扉が開いた。

そこからは真っ赤な髪はかなり……いや、もの凄い美女が出てきた。

（（確かこの子はキュルケだったか。こりゃ男に人気があるのもわかるわな。））

ルイズはかわいいというタイプだが、キュルケは綺麗というタイプである。背が高く、締まるところが締まって、出るところが出ている。まるでモデルのような女性だ。

キュルケ「おはよう、ルイズ。」

ルイズを見るとにやっとした顔をしながら挨拶してきた。

ルイズ「おはよう、キュルケ。」

それとは対照的に、ルイズは嫌そうな顔をしながら挨拶を返す。

キュルケ「それがあなたの呼びだした使い魔？」

義人を指さしながらルイズに尋ねる。

ルイズ「…そうよ。」

ルイズの顔がさらに嫌そうな顔になる。

キュルケ「へえ〜。平民の割には綺麗な顔してるじゃない。」  
ちなみに管理者は義人の願いの一つである「外見は普通よりちよい上」という願いを叶えていなかった。

なぜなら、義人の顔は元々中の上か、上の下くらいに整ってるからだ。

本人に自覚が無かっただけである。

故に管理者は、「変えなくても充分だろ」と判断したためそのままにしていたのだ。

義人「初めまして。オレは佐上義人。ここよりずっと遠方の地より召喚された、ルイズの使い魔だ。」

とりあえず義人はキュルケに挨拶をした。

キュルケ「あら、ありがとう。私はキュルケ、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ。よろしくね？使い魔さん。」

おろ？ちゃんと挨拶返してくれたよ…。と、義人は軽く感激した。  
貴族は平民を見下していると思っていたので挨拶を返されるとすら思っていなかった。

キュルケ「それにしても珍しい名前ね。遠方って、どこから来たの？」

確かにこの名前は珍しいだろう。元の世界ならば名前さえ聞けば義

人が日本人であるのはすぐにわかる。中世ヨーロッパくらいのこの世界じゃまずいないだろう。

義人「正確にはわからないんだが、おそらくロバ・アル・カイリエと呼ばれているところの出身だと思う。なにせハルケギニアという名前を聞いたことが無かつたくらいだからな。」

するとキュルケは驚いたような顔をして

キュルケ「嘘！？ハルケギニアを知らないの！？」

と言ってきた。

義人「全く交流が無いほど遠い土地なんだろう。だから自分が本当にその出身かもわからないんだ。」

なるほど…と、キュルケはあごに手を当て、納得したような顔をしながらかいた。

多分こつちで名乗るなら、オレはヨシト・サガミになるんだろうな  
と思っっていると

キュルケ「そうだ、私も昨日使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って一発でね。おいで、フレイム。」

ルイズにバカにしたような笑顔を浮かべながら、自分の使い魔を呼んだ。

すると、キュルケが出てきた扉から巨大なトカゲが現れた。真っ赤で尻尾に火が付いている。

( (ポ モンのヒトカゲか…?) )

などと、若干失礼なことを義人は考えていた。

少なくともあんなにかわいくは無い。むしろリザードの方が近いだろう。

ルイズ「これってサラマンダー？」

ルイズは悔しそうな顔をしながらキュルケに尋ねると

キュルケ「そうよ。ここまで大きな炎の尻尾は間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ。」

まるで自慢するかのようにな…いや、自慢しているんだろう。

キュルケの口ぶりからすると、随分いい使い魔を引き当てたようだ。

ルイズ「そりゃ良かったわね。」

一方、ルイズは悔しさがこみ上げまくっているようだ。今にも唾でも吐きそうである。

キュルケ「私の属性にピッタリの使い魔よ。私の属性は火。『微熱』のキュルケですもの。」

それじゃあね。と髪をかき上げながら颯爽と去っていく。

ルイズ「なんなのよキュルケのやつ！自分がサラマンダー、それも

火竜山脈のを召喚したからって!!」

キュルケがいなくなつて怒りが爆発したようだ。

義人「まあいいじゃねえかよ。そんな気にすることでもねえだろ？」

義人はルイズの怒りを静めようとするも、逆に油を注ぐ結果になつた。

ルイズ「良くないわよ！メイジの実力を測るなら使い魔を見ろつて言われてるくらいに重要なんだから！もう、なんで私があんたなのよ…。」

自分から静まつて行つたようだが、今度は落ち込み始めてしまった。

義人「ふ〜ん、なるほどね。それなら使い魔を自慢するのもわかる気がするわ。けどな、ルイズ…。」

義人はそう言うと、ルイズに背を向けながら

義人「お前が召喚した使い魔も、案外いい拾いものかも知んないぜ？」

義人はニヤツと笑いながら言った。

実際そうなのだ。管理者から貰つた力であろうと、義人には魔力無限、身体能力の上限無し。さらにネギまという、ゼロの使い魔で使われてる魔法より強力な魔法が使えるのだ。

そしてゼロの使い魔の魔法もスクウェアクラスになるだけの才能を

貰っている。

身体能力は今は前世と変わらないが、上限無しということは鍛えれば人間の限界を遥かに超えることも可能であるということだ。

それが無くても魔力無限の状態では投影魔術を使えば、ほぼ負けはあり得ない。

烈風などが相手になると敗北するかもしれないが、それでも並みのスクウエアなど相手にすらならない戦闘力を保有している。

さらに言えば、義人はガンダールブである。体を鍛えた状態で剣を握ったらどうなるのか。想像もつかない。

ハルケギニアで最も恐れられている種族、エルフでさえも力押しで圧倒しかねないのだ。

（この力は貰いものだ。けど、鍛えたものだろうと貰ったものだろうと、力は力だ。）

だがルイズはまだこのことを知らないため

ルイズ「何バカなこと言ってるの？平民なんかよりサラマンダーの方が上に決まってるじゃない。」

ふんっ、と鼻を鳴らしてルイズは先に行ってしまった。



### 第三話（後書き）

思ってたより先に進まなかった…orz

感想や意見などお待ちしております！

## 第四話（前書き）

今日何話まで更新できるかな…

## 第四話

キユルケと会った後オレ達は食堂に着いた。

とにかくデカイ。これが食堂って規模か？ここ学院だろ…。

義人の想像していた食堂は高校などである一般的な食堂が少し広くなった程度のもので、かなり驚いていた。高校の体育館よりも広いだろう食堂に豪華な料理。これからパーティーでも開くのかという規模である。

（これが貴族か。こりやすげーわ…。）

そんな感想を持ちながらルイズに付いていくと、床に一枚の皿が置かれていた。

（何でこんなところに皿が？）

落としたのなら割れているだろうが、傷一つない。それどころかパ  
ンが二切れ乗せてあった。

義人「なあ、なんだこれ？」

義人が尋ねるとルイズは

ルイズ「本来このアルヴィーズの食堂には平民は一生入れないのよ。  
だけど私の特別な計らいで、床で食べさせてあげるわ。」

そう言ってルイズは席に座る。

( (はあ…？特別な計らいが床だと？) )

義人はキレかけていた。

確かに平民と貴族が違うのはわかっていた。だがこれはあんまりだ。

義人は眼を閉じて拳を固く握りながら、必死に自分を抑えつけていた。

( (抑えろ、貴族にとつちや食堂に入れただけでも感謝しろってことなんだ。暴れたところで何も変わらねえ…) )

そう考えて自分を冷静にさせようとしていた。

義人「食事を用意してもらえるのはありがたいが、さすがに床で食う気にはなれねえや。食事は自分で何とかするからいいぜ。」

何とかする…とは言ったが、別に考えがあったわけじゃない。ただこのままだと我慢が出来なくなりそうだと考えて、とにかくこの場を離れようとした。

ルイズ「何よ？私がわざわざここで食事を取れるようにしてあげたのに、それを無駄にするつもり？」

(ダメだ、キレるな…。とにかくさっさとここを出ていこう。)

義人「ああ、悪いな。けど、この量じゃ足りそうもないんだ。それじゃあな。」

そう言うと義人は足早に食堂を立ち去った。

(ヤバかった。あと一步でキレてるところだった。それより飯どうしようかなあ…)

少し考えたものの、いい案が浮かばず、仕方なくルイズに言われていた雑用を済ませることにした。

(仕事しながら考えればいいか。とりあえず、最初は洗濯かな。)

一度ルイズの部屋に戻り、かごに洗濯物を入れ外に出るが、そこで気付いた。

どこで洗濯すればいいのかと。

(そう言えばこの学院にはメイドがたくさんいたな。誰かに聞いてみるか。)

そう考え中庭をウロウロしていると、黒髪のメイドを見つけたので声をかけた。

義人「あの〜、すみません。」

????「はい、なんででしょう?」

( (あれ?この子シエスタじゃね?) )

黒髪をカチューシャでまとめたメイドで、原作ではサイトを狙った一人である、あのシエスタである。

そのシエスタが不思議そうな顔をしながらこちらを向いている。

????「あれ?あなたは確かミス・ヴァリエールに召喚された...」

もうメイドにも伝わってるのか、早いなあ。

義人「知ってるのか?」

シエスタ「ええ、使い魔召喚で平民が呼び出されたって噂になりますよ。」

なるほど、かなり珍しいことみたいだしな。噂になるのも頷ける。

義人「そうだったのか。ところで聞きたいことがあるんだけど、いいか?」

シエスタ「はい。」

義人「洗濯がしたいんだが、どこですればいいんだ?」

シエスタ「洗濯...ですか?」

義人「ああ、ルイズの命令でね。」

シエスタ「でしたら、こちらです。」

シエスタに案内してもらった水場で洗濯を始めるも、思うように上手くない。

（（向こうには洗濯機もあったし、親にやってもらってたからなあ。  
））

それに水が冷たい…。手が死ぬ、マジで死ぬ。

日本で洗濯物を手洗いでやってる人などほとんどいないだろう。普通は洗濯機を使ってるはずだ。高校となると普通は親がやってくれるだろう。洗濯物だけでかなり苦労した。

（（昔の日本も手洗いだっただよなあ。やってみるとわかるけど、これ結構きついわ…））

なんとか終わらせるも、終わった時にはすでに昼飯時。

朝から何も食べてない義人は結構限界近かった。

( やっぱ床でも食えるだけマシか…？いや、さすがにあれは無理だ。屈辱どころじゃねえ… )

だが、それでも腹は減る。義人は壁に寄り掛かるように中庭に座り込んだ。

( 能力使って狩りでもするか？いや、生肉は食えないな。焼くにしても火が無いし…宝具使って焼け野原でも作って火を入手するか )

空腹のあまりかなり物騒な思考に走っている。それはさすがに被害がシャレにならない。

義人「ああ…どうすつかなあ」

ふと独り言を呟くと、義人に誰かが近づいてきた。

「…？」「あの…どうかしたんですか？」

義人「ん…？ああ、さっきの…」

シエスタ「あ、私シエスタと言います。」

そう言えばさっき名乗ってなかった事を思い出し

義人「オレは佐上義人。知ってる通りルイズの使い魔だ。よろしくな。」

シエスタ「はい、よろしくお願ひします。それで、どうかなさった

んですか？」

ここで義人は考えた。そう言えば、サイトは厨房で賄いを貰ってなかったか？と。

とりあえずシエスタに相談すれば何とかなるかもしれないと思い、事情を説明すると

シエスタ「でしたら、厨房にいらしてください。賄い食で良かったらお出しできますから。」

義人は助かったと思った。このままだとプライドを捨ててルイズに謝るか、餓死するか二択だったのだ。

（本当に助かった。正直ルイズに頭は下げたくなかったからなあ）

そしてシエスタに連れられて厨房へと向かい、賄い食を貰った。

そのお礼としてシエスタの手伝いをすることにしたのだが…

義人は食事にありつけた嬉しさでいっぱいになり気づいていなかった。

決闘フラグが立ったことに…



## 第五話（前書き）

まだ決闘に入りませんorz

## 第五話

義人 s i d e

オレは今飯を食わせてくれたお礼に、シエスタの給仕の手伝いをしていた。

シエスタは気にしなくていいと言ってくれたが、何とか頼みこんで仕事を手伝わせてもらってる。

何かしてもらってそのままってのはいい気がしないしな。

それでシエスタの給仕を手伝わせてもらってると

????「おい、ギーシュ。お前今誰と付き合ってるんだよ？」

友人に囲まれたキザな貴族がいた。ギーシュというらしい。

ギーシュ「僕は誰とも付き合っていないよ。バラは多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

思わず頭を抱えなくなった。いくらなんでもキザすぎるだろ。聞いているこっちが恥ずかしい。

その時、ギーシュと呼ばれていた男のポケットから何かが落ちた。

小さな瓶だったが、とりあえず拾ってやるかと思ひ

義人「おい、落し物だぜ。」

と、声をかけるが無視される。

平民とは口も利きたくないってか？

と、軽くイラツとしながらも

義人「ここに置いとくぞ。」

と、ギーシュの前に少し力を入れて置いてやった。

するとギーシュはこちらを睨みながら

ギーシュ「何を言ってるんだね？それは僕のものじゃないよ。」

義人「いや、間違いなくお前のポケットから落ちたよ。」

落ちた瞬間を見たんだから間違いはない。

すると、ギーシュの友人が

友人1「その香水…モンモランシーのやつじゃないか？」

友人2「ってことは、お前モンモランシーと付き合ってたのか！」

周りがそう騒ぎ始めた時、義人は

(「ああ、こいつがギーシュだったな。ってことは今から起こるのは…」)

義人が原作知識を思いだそうとしていると、ギーシュが弁解を始めた

ギーシュ「違う、いいかい？彼女の名誉のために言っておくが…」

瞬間に近くのテーブルに座っていた栗色の髪をした女の子がガタツと立ち上がり、ギーシュに近づいて

???「やっぱり…ミス・モンモランシーと付き合っていたんですね。」

と言いながら泣き始めた。

義人は(「ああ、この子が浮気相手の子か」)と思っていると

ギーシュ「違うよケティ。彼らは誤解しているんだ。その香水は…」

ギーシュがそう言った瞬間、ケティと呼ばれた少女は思いつきりギーシュの頬を叩いた。

ケティ「さようなら！」

(「今のは痛いだろうなあ」)

平手というのは見た目以上に威力があるのだ。ぜひ刃 を読んでもらいたい。

ギーシュが頬をさすっていると、遠くの席に座っていた金髪の巻き

髪の女の子が立ちあがった。

そしてかつかつとギーシュに近づいていく。

（確か…あれがモンモランシーだよな？）

つてことは修羅場かな？と義人が考えていると

モンモランシー「やっぱりあの1年の子に手を出してたのね。」

と、ギーシュを睨みながら言う。ハッキリ言ってかなり怖い。

ギーシュ「誤解だモンモランシー！彼女とは少し遠乗りに行っただけで……」

ギーシュは必死に言い訳をしようとするが、最後まで言う前に頭からワインをかけられた

モンモランシー「うそつき！」

そう怒鳴りつけると、その場を去ってしまった。

周りにはシーンとした気まずい空気が流れるが、ギーシュはハンカチで顔を拭きながら

ギーシュ「…彼女たちはバラという存在の意味を知らないようだ。」

と、全く反省していないようなことを薄い笑顔を浮かべながら、やれやれといった風に言いだす。

( (ばかばかしい……) )

そう思った義人はシエスタの手伝いに戻ろうと踵を返すが

ギーシュ「待ちたまえ、平民。」

義人「なんだ？」

ギーシュに呼び止められた義人は振り返る。

ギーシュ「君の軽率な行動で二人のレディが傷ついた。どう責任を取るつもりだね？」

さすがに義人は呆れた。

自分が二股をかけて、それがバレたのはオレに責任があるって言うのか。

義人「ふざけんなよ？二股かけてたお前が悪いんだろ。」

ギーシュ「いいかい？平民。僕は君が瓶を拾い上げた時、知らないふりをしたじゃないか。話を合わせるくらいの機転があってもいいだろう？」

義人「アホか。バレるのが嫌なら二股なんかかけなきゃ良かったんだ。自業自得だろ。」

さすがに義人もイライラしていた。あまりに理不尽すぎる。八つ当たりもいいところだ。

するとギーシュの顔から笑顔が消え、立ち上がった。

ギーシュ「君には一度、貴族に対する礼儀というものを教える必要があるようだ。」

( (ああ、思いだした。この後サイトは決闘したんだっけ？ ) )

ここで義人はようやく思い出す。

( (なら、受けてやるか。 ) )

義人「おもしれえ、教えられるもんなら教えてもらおうじゃねえか」

義人はニヤリと笑いながらギーシュを睨みつける。

ギーシュ「ヴェストリの広場で待っているぞ！」

そう言うとギーシュはその場から去って行った。

( (とりあえずシエスタに伝えて置かないとな…… ) )

そう思いシエスタを探そうとするが、すぐ後ろにいたことに気づき声をかける

義人「悪いな、シエスタ。用が出来たから後頼むわ。それと、ヴェストリの広場ってどこだ？」

シエスタに尋ねると、シエスタは顔を真っ青にしてポツリと呟いた

シエスタ「……殺されちゃう。」

義人「…は？」

シエスタ「貴族を本気で怒らせたりしたら……」

シエスタは走って逃げてしまった。

(そりゃあ、貴族は平民をなんとも思っただねえしな。気まぐれで殺されたっておかしくないんだ。その貴族を怒らせたら、怖がるのが普通か…。)

とりあえず誰かに場所を聞こうと思っていると

ルイズ「あんた何してんのよ！？見てたわよ！」

後ろからルイズに怒鳴られた。

義人「見てたなら何してるのかわかるだろ？」

するとルイズは呆れたような声で

ルイズ「謝ってきなさい。でないとかゲガじゃ済まないわ。平民がメイジに勝てるわけが無いのよ！」

義人「そんなもんやってみなきゃ分からないな。」

ルイズ「わかるわよ！魔法の使えない平民がメイジに勝てるわけないでしょ！？」

義人は話しても埒が明かないと思い、他の人に尋ねた。

義人「ヴェストリの広場はどこだ？」

すると他の学生が「ついて来い」と義人をヴェストリの広場まで連れて行った。

ルイズ「ああもう！勝手なことばかりする使い魔ね！」

ルイズも走ってそのあとを追いかけた。

学院長室 side

義人がギーシュとひと悶着起こす前……

トリスティン魔法学院の学院長であるオスマンの元に、一人の教師がやってきた。

コルベール「オールド・オスマン！！！」

オスマンのいた学院長室の扉がバン！！と勢い良く開けられた。

オスマン「なんだね？ミスタ・ツルツパゲール。」

コルベール「私はコルベールです！」

オスマン「おお、そうじゃったな。して、一体どうしたというのだね？」

間違いなくわざと間違えただろうとツツコミを入れたくなる間違いをするポケ老人<sup>オスマン</sup>

コルベール「まず、こちらの書物をご覧ください！」

そうやって出したのは『始祖ブリミルの使い魔たち』という古い書物だった。

オスマン「また君はこんな古臭い書物を漁っておったのか…。そんなことしてる暇があったら…」

コルベール「次にこちらもご覧ください！」

と、オスマンが言いきる前に義人のルーンのスケッチを見せた。

するとオスマンの表情が変わり、だんだんと厳しい目になっていく。

オスマン「ミス・ロングビル。席を外しなさい。」

ロングビル「はい。」

そう言うと、先ほどから学園長室にいた、オスマンの秘書であるロングビルは退室して言った。

オスマン「詳しく説明するんじゃ、ミスタ・コルベール。」

さっきまでのポケ老人の姿は最早なかった。

## 第五話（後書き）

次話はギーシュとの決闘です！

本当はこの話で入っちゃいたかったけど…。

感想お待ちします！

## 第六話（前書き）

ちよつと長くなりましたが、ギーシュとの決闘です！

## 第六話

義人 side

義人「悪いな、待たせたか？」

義人はニヤツと笑いながら、先に来ていたギーシュに声をかける。

ギーシュ「気にしなくていい。むしろ、逃げずに来たことを褒めてあげたいくらいだ。」

ギーシュも薄く笑いながら義人を見る。

明らかに人を見下した目だ。

まあ無理もない。

平民は貴族に勝てない。これはハルケギニアにおいて常識とも言っている。

だが……

( (それは…相手がただの平民だったらの話だけだな?) )

ギーシュ「諸君!!! 決闘だ!!!」

周りにいたギャラリー達からワァ!!!と歓声が上がった。

オスマン side

オスマン「ふむ、なるほどのお……」

オスマンはコルベールからルイズが使い魔召喚の儀式で平民を呼び出したこと、そしてそのルーンが気になり調べていたことを聞いた。

オスマン「それでそのルーンが始祖の使い魔『ガンダールブ』と同じであるということに辿り着いたわけじゃない？」

コルベールは興奮したように

コルベール「その通りです！彼の左手に現れたルーンは、その書物に記載されている『ガンダールブ』と完全に一致しているのです！  
！」

オスマン「して、君の結論は？」

コルベール「あの少年はガンダールブかと……」

オスマンはふむ…と頷きながら少し考え込む。

仮にあの少年がガンダールブだとしたら？ミス・ヴァリエールが虚無の担い手である？それを王宮に報告したらどうなる？と……

コルベール「どうでしょう?。」

コルベールは額の汗をハンカチで拭きながらオスマンに尋ねる。

オスマン「ルーンが一致したのなら、あの少年は恐らくガンダールブなのじゃろう。しかし、そう決めつけるのはまだ早いと思わんかね?。」

コルベール「そうですね……。」

今はまだ情報が少ない。というより、ルーンが一致しただけではない。重大なことであるため、たったひとつの情報で結論は出せなかった。

オスマン「今はまだ判断材料が少ない。しばらく様子を見るとしよう。ミスタ・コルベール、この事は決して口外しないようにの。」

コルベール「わかりました。」

コルベールがそう返答すると、コンコンと扉から音がする。

オスマン「誰じゃ?。」

すると扉の向こうから声が聞こえた。

ロングビル「私です、オールド・オスマン。」

オスマン「何の用じゃ?。」

ロングビル「ヴェストリの広場で決闘をしてる生徒がいるようです。」

他の教師が止めようとしているのですが、他の生徒たちに阻まれ止められないようです。」

オスマンはそれを聞き溜息を吐く。

オスマン「全く…暇を持て余した貴族ほど性質の悪いのはおらんで……決闘をしているのは？」

ロングビル「一人はギーシュ・ド・グラモンです」

オスマン「あのグラモンとこのバカ息子か。ならどうせ女の取り合いじゃろう。して、相手は？」

するとロングビルは一拍置いて

ロングビル「……相手はミス・ヴァリエールの使い魔の少年のようです。」

オスマンとコルベールは目を見開いた。

彼が本当にガンダールブなのか確かめられるのでは？と…

ロングビル「教師たちは『眠りの鐘』の使用許可を求めています。」

オスマン「たかが子供のケンカに秘宝を使う必要があるまい。好きにやらせるよう伝えなさい。」

ロングビル「わかりました」

ロングビルが去っていく足音を確認し、オスマンとコルベールは顔

を見合わせる。

そしてオスマンは部屋にかけてあった鏡に向かって杖を振るうと、ヴェストリの広場が鏡に映し出された。

ギーシュside

ギーシュ「さて、始めようか」

ギーシュはそう言うと、バラの杖を振った。そのバラの杖から一枚の花弁が落ちる。そしてその花弁は甲冑を来た女戦士の、人形になった。

ギーシュ「僕はメイジだからね。魔法で戦わせてもらうよ。」

対する義人は……動かなかった。

腕を組み、仁王立ちしながらギーシュを見ているだけだった。

ギーシュ「言い忘れていたな、僕は『青銅』のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ。」

すると『ワルキューレ』は一気に接近し、義人の腹に拳を放つ。

誰もが決まったと思った。

ガキイン!!!!!!!!!!

義人以外は……

ギーシュ「え……？」

ギーシュは何が起きたのかわからなかった。それはギャラリーも同じだった。

確実に決まったと思った『ワルキューレ』の一撃が、見えない『何か』に防がれ、『ワルキューレ』の拳を砕いていた。

ギーシュ「一体何を……」

すると義人は静かに口を開いた

義人「そっいや、まだ名乗ってなかったな。オレは佐上義人。

ロバ・アル・カイリエの

メイジだぜ？」

ギーシュ「ロバ・アル・カイリエの……メイジ？」

ギーシュとギャラリーは心底驚いたような顔をしていた。

それはそうだろう、今までただの平民だと思っていた男が実はメイジだった。

しかも彼は『ゼロ』と呼ばれるルイズが何度も召喚に失敗してようやく呼び出した使い魔だ。

ゼロのルイズがメイジを使い魔にした？では、今のは魔法で防がれたのか？しかし、彼は杖を持っていない。詠唱もしていないはずだ。それなのに魔法を発動した？

ギーシュは混乱していた。わけがわからなかった。

さっきの憂さ晴らし程度で決闘を申し込んだのに…。

一方的に叩き潰せるだろうと思っていたのに…。

自分と同じメイジに決闘を挑んでいた？

いや、自分とは違う。未知の魔法を使うメイジだ。

義人「さて、続けようぜ。」

ニヤリと笑った義人の顔にギーシュは初めて恐怖を感じていた。

義人 side

( (あつぶん) ……ぶっつけ本番なんかでやるべきじゃねえな… )

義人は内心焦っていた。理由は…

( (決闘の事直前まで忘れてたから、能力の確認してなかったんだ

よな。防げて良かったぜ……」

…ハッキリ言っただけである。

原作知識を持つてるが、うる覚えだったから忘れてたとか、バカとしか表現のしようが無い。

（とりあえずネギまの『魔法障壁』はだいぶ固いみたいだな。まあ当たる前に魔力を流し込んだが、実際そこまでしなくても防げたかな。）

とりあえず防御はどうにかなった。問題は攻撃である。

（さすがに『雷の暴風』とかは使えないな。最悪学院が吹っ飛ぶ。投影で作った宝具を射出する？いや、それも危ないな……）

どうしようかと考えてると、ふと一つの考えが思い浮かぶ。

（投影で武器を作ってガンダールブの能力を確認するか？）

あらゆる武器や兵器を使いこなせる『ガンダールブ』のルーン。

アニメで見えてはいたが、実際に使って試してみるか……と

（となると武器を作らないとな。それなら、やっぱりあれだろ。）

義人「……トレース・オン」

そう呟くと、義人の左手に輝く黄金の剣が現れる。

Fateでセイバーが所有していた宝具

聖剣『エクスカリバー』

そして義人の左手にあるルーン『ガンダールブ』が輝きだす。

義人「…いくぞ？」

そういつと義人は『ワルキューレ』に斬りかかるが……

スッ……

( …… え？ 斬った感触がなかったぞ！？ )

だが目の前で『ワルキューレ』が真っ二つになっている。斬ったのは間違いない。

( …… どんな切れ味だよ…。 斬った感触が無かった位スッパリいくつて… )

自分の武器の切れ味に軽く冷や汗をかくが、今は決闘の最中だ、と思えばギーシュに向かって駆け出す。

ギーシュ「う、うわあああああああ！！！！！！」

ギーシュはバラの杖を振るって7体の『ワルキューレ』を作り出し、義人に斬りかからせる。

平民相手なら1体で十分だろうと思っていたが、それがあっさり斬り裂かれた。

ギーシュの頭には自分が斬られた時の瞬間が浮かんでおり、顔を真っ青にしている。

( (作られたのは7体、向かってきてるのは6体。1体は護衛用か？ ) )

向かってきた『ワルキューレ』にとにかく斬りかかるが…

( (…遅すぎないか？ほとんどスローモーションじゃねえか。『ガンダールブ』ってここまで凄いいもんだったのか？ ) )

まるでビデオのスロー再生のような、非常にゆっくりした速度で斬りかかってきているように見える。

上から義人の頭へと真っ直ぐに振り下ろされた剣を、右足を後ろに下げ、横を向くような形で紙一重で避け、同時に斬りかかってきた『ワルキューレ』の胸を薙ぐ。

次に2体同時に斬りかかってくるが、左のワルキューレは横に薙ぎ、右のゴーレムは斬り上げてきた。

( (めんどくせえな！ ) )

だが義人は薙ぎ払いを『エクスカリバー』で叩き斬り、斬り上げを踏みつけた。

いくら剣とは言え、素材が青銅。しかもまだ勢いのついていない状態で踏みつければ止められないことは無い。

まあかなりの動体視力と反射神経が必要だが、そこは『ガンダール  
ブ』だから可能だったんだろう。

さらに『エクスカリバー』は青銅程度ならなんの苦も無く斬り裂ける。

一体どこに薙ぎ払いを上から叩き斬るやつがいるのか。義人自身も  
軽い恐怖を覚えていた。

向かってきていた2体の『ワルキューレ』を一気に薙ぎ払い、ギー  
シュの方を向く。

( (後は向かってきてる3体と護衛の1体だ!!) )

義人はここでさらに一つ試してみることにした。

『瞬動術』ネギまで登場する、高速移動術

( (使ってみるか!) )

義人は足に魔力を溜め、瞬動術で目の前の『ワルキューレ』の背後  
に回ろうとするが

義人「あれ!？」

ギーシュ「なっ!？」

義人が回りこんだのは護衛用の『ワルキューレ』の正面。

つまり勢い余って突破してきてしまった。

( (瞬動術か…これは練習しないと無理っばいな) )

そう考えると正面にいた『ワルキューレ』を斬り裂く。

ギーシュは呆然としており状況に付いていけてない。

( (おいおい、スキだらけだぞ?) )

護衛用の『ワルキューレ』は1体。それを今斬ってしまったので、義人とギーシュの間に邪魔するものは何もない。

義人はそのままギーシュに接近し、腹を蹴り飛ばした。

ギーシュ「ぐっ!?!」

義人の速さにまるで反応出来ずに後方へと吹き飛ばされる。

そして吹っ飛ばしたギーシュに近づいて首元に『エクスカリバー』を当てる。

義人「まだやんのか?」

魔法を使えるようなスキは無い。義人の背後にいる『ワルキューレ』を動かしても、義人がギーシュを斬る方が早いだろう。

最早ギーシュに抵抗の術はない。

ギーシュ「ま、参った…」

地面に座り込んだまま、がっくりと項垂れ敗北を宣言する。

途端、周りから大きな歓声が沸いた。

まさかギーシュが平民に負けるとは思わなかった。あいつは東方のロバ・アル・カイリエメイジだったのか！あの剣はどこから出てきた！？もの凄い速かったな！と……

そしてギーシュは口を開いた。

ギーシュ「君は強いな……。まさか平民に負けるなんて思ってなかったよ……」

義人「人を見かけで判断するなつて教わらなかったか？相手が誰だろうと、ナメてかかれれば痛い目見るぜ。」

ギーシュ「油断してたのは認めるよ。まあ油断してなくても結果は変わらなかっただろうがね。」

そう言つてギーシュは立ち上がり、義人に頭を下げた。

ギーシュ「僕の軽率な行動で君には迷惑をかけた……。すまなかったね。」

義人は『エクスカリバー』を消して、ひらひらと手を振りながら

義人「別にいいよ。つてか、お前が謝らなきゃならないのはオレじやねえだろ？あの子たちに謝れよ。」

ギーシュ「彼女たちにもちゃんと謝るさ。だが、君にも迷惑をかけ

たからね。」

（捻くれてはいたけど、根はいい奴なんだよな。）

そう思いながら義人は短く「ああ。」と答え、ルイズの方に向かっていく。

ルイズは驚きのあまり呆然としていた。

自分の召喚した使い魔が、ただの平民ではなくメイジであったこと。そしてギーシュの『ワルキューレ』を圧倒し勝利してしまったこと。

もしかしたら、自分が召喚した使い魔は実は凄い奴だったんじゃないか…と。

そして義人はルイズに近づき

義人「な？やってみなきゃわかんなかったろ？」

と、笑いながら声をかける。

ルイズはハツとするも、すぐに義人に噛みついた。

ルイズ「どうして魔法が使えること黙ってたのよ！？普通主人に教えておくべきでしょ！？」

義人「いや、召喚されたの昨日だしな。それにこっちでもちゃんと使えるか確認しておきたかったんだよ。」

義人は苦笑いしながら答える。実際、能力の事は色々試してみたら伝えようと思ってたのだ。

だが義人は原作の事をすっかり忘れていたため、いきなり本番で能力をしようしたのだ。

ルイズ「とにかく！部屋に戻ったらキッチリ説明してもらおうよ！」

ルイズはそういうとさっさとその場を離れていった。

オスマン side

コルベール「オールド・オスマン。使い魔の少年が……勝ってしまいました……」

オスマンとコルベールは鏡に映し出された決闘が終了すると、ゆっくりと口を開いた。

オスマン「凄まじい力じゃな……。しかし、まさか彼がメイジじゃったとは……」

コルベール「はい、さすがに予想外でした。しかし、あれはハルケギニアの魔法ではありませんね…」

オスマン「彼はロバ・アル・カイリエのメイジだと言っておった。恐らく、向こうの魔法なのだろう。」

コルベール「しかし、これでは『ガンダールブ』の力なのか判断できませんね…。」

義人は『ガンダールブ』の力を行使していた。しかし、ハルケギニアにおいて未知の魔法を使用していたところを見ると、本当に『ガンダールブ』による力なのか、判断ができなかった。

オスマン「もしかすると、彼は他にも力を隠し持っているかもしれない。今はまだ何とも言えんが…」

どちらにせよ、彼がとてつもない力を持っていることは間違いないのお…と、呟いた。

コルベール「王宮には報告しますか？」

オスマン「それはならん！」

オスマンは厳しい口調でコルベールを止める

オスマン「今王宮にこの事を伝えれば、間違いなく戦争が起きるじやろう。それだけはならん。」

コルベール「そうですね…。わかりました。」

コルベールもオスマンの言ってることが理解できたようで、重く頷く。

オスマン「今はただ、見守ることしかできんの。彼らの事を…。」

オスマンはハルケギニアの将来に不安を感じていた。

一体どうなるのか…と

## 第六話（後書き）

なんかグダグダな感じしかしない…。

文才が欲しいorz

義人はロバ・アル・カイリエのメイジだと名乗ってますが、これは周りにロバ・アル・カイリエの出身だと名乗るためにこのように言ってます。

本人は今のところ前世については話す気が無いからですw

それと、セリフの前にキャラの名前を書いていますけど読みづらかったりしますか？

結構邪魔かもしれないなあと思ったり…。

感想&指摘お待ちしております！

## 第七話（前書き）

全然思い浮かばなかった…。  
序盤からこんなんでどうするよオレ…orz

## 第七話

ギーシュと決闘した日の夜、義人はルイズの部屋で尋問を受けていた。

「それで？なんでメイジであることを黙ってたのかしら…？」

額に青筋を浮かべ、背後にどす黒いオーラを纏いながら義人に尋ねるルイズ。

顔は笑っているのだが、口の端がヒクヒクしている。

「さっきも言ったが、こつちでも能力が使えるのか確認してから伝えようと思ってたんだよ。魔法が使えるって言って使ってみたら、使えませんでしたじゃ笑えねえしな。」

義人は出来るだけ平静を装って答える。内心ガクブルである。その証拠に額には薄ら汗が浮いていた。

（（こえ〜…なんでこんな怒ってたんだ？））

「ふ〜ん…まあいいわ。それじゃ、あんたはどんな魔法が使えるの？」

どう説明しようか…と義人は悩む。

こつちの世界には存在しない魔法なのだ。わかりやすく説明しよう  
とすると時間がいくらあっても足りない。

「ん、どんかって言われてもな。どこから説明すればいいのやら  
……」

「なら、さっきの魔法について説明しなさい。」

さっきのと言つと…投影の事か？

「えっと、剣を作った魔法について…か？」

「そうよ。あんたはさっき、何も無いところから剣を作った。あれ  
はどう見ても錬金じゃないし、あんた杖も持つてなかつたじゃない。

「ハルケギニアじゃ杖が無いと魔法が使えないんだよなあ。不便じゃ  
ないのか？」

「まず杖に関してだが、オレ達の国ではある程度の實力を持つメイ  
ジは杖を必要としない。中には使つてゐる者もいるが、基本的には初  
心者だけだな。」

これはネギまでの話だ。実際エヴァは杖を使わずに魔法を使つてた  
しな。

「そしてさっき剣を作った魔法は投影つて言つんだ。自分の記憶に  
ある武器や防具を魔力によって作り出す魔法だな。錬金みたいに素  
材となる物を必要としない。ただし、本物には多少劣る贗作だ。」

投影は本当は魔術だが、魔法と魔術の違いを説明するなんてめんどくさ過ぎる。F a t eとゼロの使い魔じゃ魔法の定義がまるで違うからな。

「杖を必要としないなんて信じられない…。それに魔力で物を作り出すなんて不可能だわ…。」

「それは異なる魔法体系だからだろ？オレもハルケギニアの魔法を使おうと思ったら、杖が必要になるかもしれないし。それに投影はそんな簡単な魔法じゃない。」

「どうということ？」

「投影という魔法は作り出す物を深く理解する必要がある。何のために作られたのか、その武器の歴史や工程をな。」

普通の魔法使いにはまず不可能だ。「知っている」「じゃなくて」「理解している」「だからな。」

「それに上位の武器、つまり宝具や神器と言ったものを作ろうと思ったら魔力の消費も激しいんだよ。そこらの魔法使いじゃ作れないし、作れたとしても魔力が枯渇して最悪死ぬぜ。」

とりあえずこんなもんかな。他の魔法については追々説明すればいいだろう。

「なるほどね。よくわからなかったけど、私たちが使ってる魔法と全く違っつてというのは理解できたわ。それよりあんだ、その、投影だっけ？使って大丈夫なの？」

「オレは魔力だけが多いからな。そこらのメイジとは桁がいくつかわらうぜ。実際さっきの決闘で作ったのは宝具の一つだしな。」

管理者から魔力無限を付けてもらってるからな。魔力が枯渇するとは無い。

「ふん、他には使える魔法は無いの？」

「あるにはあるが、一つ一つ説明してたら時間がかかりすぎるからな。また別の機会に説明するよ。もう夜も遅いしな。」

窓の外を見ると二つの月はかなり高い位置まで登っていた。

「そうね。それじゃ、寝るわよ。」

義人はルイズの着替えを手伝い、毛布にくるまって眠りについた。

しかし、ルイズは寝付けなかった。

自分の使い魔がもの凄い存在だった。

それを召喚できたということは、自分は落ちこぼれじゃなかったんだと…。

いつか、誰にもバカにされないようなメイジになれるかもしれない。

そう思うと、なかなか眠りに付くことはできなかった。

次の日の朝、ルイズを起こし着替えを手伝い、ルイズは食堂に向かった。

オレは昨日の朝、床で飯を食いたくないと行ったので付いていたかなかったが

（今日も飯貰えないかな？ 凶々しいとは思っけど、他に方法もないしなあ……）

そう考えながら厨房へと向かっていた。

そして厨房に入ると

「お、我らの剣が来たぞー!!」

と、聞こえた。

( (我らの剣?...ああ、オレがギーシュを倒したからそう呼ばれて  
んのか) )

原作ではサイトが倒したが、この世界では義人が倒したため義人が  
我らの剣と呼ばれていた。

( (でもオレ、平民だがメイジだぞ?) )

と知っている

「よお！我らの剣、今日も飯食いに来たのか!？」

そう声をかけてきたのはコック長のマルトーだ。

実は昨日、シエスタに賄いを貰った時に知り合っていたのだ。

「ああ、悪いんだけど朝食貰えないかな？」

「おう、大歓迎だ！好きなだけ食って行きな!!」

そう言うとテーブルにドカドカと大量の食べ物置かれていく。

( (さすがにこれは多すぎるだろ...) )

明らかに10人分はありそうな量がテーブルへと並べられていく。

「さあ、食べ！」

「いや、無理だからな!？」

義人も普通の人よりは多く食べられるが、それでも貴族の料理。

一人分が半端なく多い。

あいつらこんなに食ってるのか?と思っただが、大半の貴族は食べただけ食べて残しているらしい。

一部の貴族は食べきってるらしいが…。

「全部食べなんて言ってねえよ。好きなだけ食べて言ったんだ!」  
と笑いながら肩を組んでくる。

「さあ食ってくれ!我らの剣!」

と、言われたのでありがたく頂いた。

「なあ、その我らの剣ってなんだ？」

と、疑問を口にする

オレは確かに平民だがメイジだ。サイトとは違い魔法が使える。

「お前さん、剣一本でメイジを倒したんだろう？ すごいじゃねえか！！だから我らの剣だ！」

確かにそうだが、魔法障壁や瞬動を使ったのに剣一本って…。

ああ、こつちには無いから知らないのか。

「でもオレ、一応魔法使えるぜ？ あの剣だって魔法で作ったもんだしな。」

「ほお。だが、剣でメイジを倒したことには変わりねえだろ？ オレ達平民にとつちゃ、お前さんは希望だ！」

そんなもんなのかね。まあそれで飯食わせてもらえるなら悪くないけど。

だが一つ言いたい

「我らの剣はやめてくれ。正直恥ずかしい……」

その頃、宝物庫の前に一人の女性が立っていた。

「おや、ミス・ロングビル。ここで何を？」

女性の後ろから声をかけたのは我らがつるp。コルベールだ。

「いえ、宝物庫の目録を作ろうと思ったのですが鍵が無くて…。」

ロングビルはコルベールの方を向き、苦笑いしながらそう言った

「宝物庫の鍵でしたらオールド・オスマンが管理していたはずですよ。今はご就寝中のようですが…。」

「そうですか…。まあ急ぎの仕事ではありませんし、日を改めますわ。」

そう言ってロングビルは宝物庫の前から去ろうとするが

「ああ、ミス・ロングビル…。よろしかったら昼食を一緒にしませんかな？」

コルベールは少し照れくさそうに昼食に誘う。

ロングビルは少し考えた後、にっこりと笑いながら

「…ええ、構いませんわ。」

「そうですね！それは良かったです！では参りましょう。」

コルベールは完全に浮かれていた。

そして食堂に向かう最中、ロングビルと宝物庫の話をしていて、うっかり口を滑らせた。

宝物庫の弱点に付いて。

その夜、ルイズに言われていた雑用を済ませて義人は部屋に戻ろうとしていた。

（…全く、人使いが荒いな。飯は厨房で世話になってるから、実際寝床の提供しかしてもらってないのに…割に合わないぜ）

しかもその寝床は床に毛布1枚である。確かに割に合わない。

そんな事を考えながら寮の廊下を歩いていると

「ん？あれは確か…フレイルムだったか？」

キュルケの使い魔であるフレイルムが廊下の真ん中にいた。フレイルムは義人の事をずっと見詰めている。

「なんだ？オレに何か用か？」

するとフレイルムは義人の姿を確認しながらキュルケの部屋の前に移動する。

（（ついて来いつてか？））

とりあえずキュルケの部屋の前に立つと、突然扉が開いて中に引きずり込まれた。

「うおっ！？何だいきな」…」

「…いらっしやい。」

引きずり込んだのはもちろんキュルケだ。それもかなり過激な格好で。

そしてフレイルムはこっそりドアを閉めて部屋の隅に移動する。

「それで？いきなり引きずり込んで、何の用だ？」

「簡単よ、私はあなたに惚れたの。ギーシュと戦ってた時のあなた、

かつこよかったわ…。だからいきなりだけど、こつして部屋に入ってもらったの。」

( ) ( ああ、なるほどな。 ) ( )

義人は原作を思い出していた。

確かサイトはギーシュに勝ったことでキュルケに惚れられたはず。つまりそれが自分にも起こったのかと。

「それは嬉しいが、今は断らせてもらうよ。オレはキュルケのこと、名前くらいしか知らないからな。」

キュルケは他にも男がいる。魔法で串刺しなんかごめんだ。

「だから、今からお互いを知るんじゃない。」

「こんなやり方で知ろうとは思わねえよ。それじゃあな。」

そう言うと義人はさっさと部屋を出ていく。長居するとルイズが乗り込んでくるからだ。ただでさえ悪い待遇がこれ以上悪くなつてたまるか…と。

「簡単には釣れなかったわね。まあいいわ、無理に押ししても引かれるだけだし、今夜はあきらめましょう。」

そう言ってキュルケはグラスにワインを注いだ。



第七話（後書き）

本気で願う

文才が欲しいと…

感想&指摘お待ちしております！

## 第八話（前書き）

あと3 4話で1章が終わるかな…？

## 第八話

「買い物に行くわよ。」

ギーシュとの決闘から何日か経った日曜日(こっちでは虚無の曜日  
というらしい)

ルイズに言われキョトンとしてる義人。

「買い物?どこまでだ?」

「トリスタニアよ。」

トリスタニア。トリステインの王都でトリステイン最大の街だ。

「私は馬を手配してくるから門のところまで待ってなさい。」

そう言うとルイズは部屋を出て言った。

(オレ馬乗ったことないんだが……バイクみたいな感じか?)

そんなことを考えながら義人も部屋を出ていく。ちなみにバイクと馬じゃ全く違う。絶対に違う。



ルイズはポカーンとしているが、義人の飛行魔法はネギまの物である。速度も飛行できる時間もフライとは違う。

「オレの国の飛行魔法なら馬と同じ速度で飛べるからな。無理に乗ることもないだろ。」

そう言つて義人は馬を一頭返しに行った。

その頃、ルイズの部屋の前にはキュルケがいた。

まあ、言うまでもなく義人を口説きに來たわけだが…

コンコン、とノックをするが返事は無い。するとキュルケは何の躊躇いもなくアンロックで部屋の鍵を開ける。

本来重大な校則違反のはずだが、まるで気にした様子は無かった。

「はあ〜い。って…いないわねえ。」

ふと窓の外を見ると、門のところにお目当ての人（義人）とオマケ（ルイズ）がいた。

ルイズは馬に乗って走っていきが、義人は後を追うように宙に舞いながら付いて行った。

「どこかに行くみたいね。それなら……」

そしてキュルケはルイズの部屋を飛び出し、親友の部屋へと向かう。

タバサ。

魔法学院の生徒でルイズ達と同じ2年生。

魔法学院では数少ないトライアングルクラスのメイジである。

彼女は虚無の曜日、いつも一人自室で本を読んでいた。

今日もいつもと同じように本を読んで過ごしていたのだが、突然扉をドンドンと叩かれる。

最初は無視していたが、だんだん音が大きくなってきたので、めんどくさそうにサイレントの呪文をかける。

これで静かになった。そう思っていたがドアは勢いよく開かれた。

入ってきたのはキュルケだった。タバサはキュルケに気づいているが、それを無視している。

するとキュルケはタバサの本を取り上げ自分の方を向かせるが、サ

イレントがかかっているため、何を言っているかわからない。

しかたなく、タバサはサイレントを解く。

「タバサ！今から出かけるから支度してちょうだい！」

「虚無の曜日。」

タバサは一言そう言う。それだけで十分だと思ったのだろう。

「わかってるわ。あなたにとって虚無の曜日がどれだけ大事か。でも、私は恋をしたのよ！あのヴァリエールの使い魔に！だけど、二人だけでどこかに行っちゃったのよ！あなたの使い魔じゃないと追いつかないのよ。だから助けて！」

キュルケはタバサに泣きつく。

そう言うことなら仕方ない。キュルケは親友。自分にしかできないなら協力するしかない。

それにタバサ自身、あの使い魔には興味があった。

あの見たこともない魔法を使った彼に。

彼がいれば、自分の目的は達成できるかもしれない…と。

タバサは無言で頷き、窓を開けて口笛を吹き飛び下りた。

キュルケも後に続いて飛び降りる。

すると二人をガシツと何かが受け止めた。

「いつ見ても惚れられするわね。あなたの使い魔は。」

タバサの使い魔は風竜の幼生だった。

タバサは短く

「どつち？」

と、尋ねる。

「あつ…慌ててたからわからないわ。」

タバサは

「人間二人。食べちゃダメ。」

と、告げる。

短く鳴くと、二人を乗せた風竜は空高く舞い上がった。

ルイズと義人はトリスタニアの大通りを歩いていた。

大通りと言っても5メートルもない。こちらだとマイルという単位だが、その位しかない

正直狭いと義人は思った。5メートルと言えば車2台が限度、3台は通れない位である。

そこで義人はふと、ルイズに声をかける

「なあルイズ。武器屋は無いか？」

確かこの時、サイトは『ある剣』を手に入れていた。

義人はそれを思い出したのでルイズに頼んでみた。

「魔法で武器は作れるけど、万が一の為に剣を携帯しておきたいんだ。」

ルイズは構わないわ。というと、武器屋に向かって歩いて行った。

店に入ると50代くらいの親父が店の奥にいた。

「旦那。貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや。」

と、ルイズを胡散臭げに見つめながら言った。

ルイズは腕を組みながら客よ、と言う。

「こりやおったまげた。貴族が剣を！おったまげた。」

「どうして？」

「いえ、若奥様。坊主は聖具をふる、兵士は剣をふる、貴族は杖をふる、そして陛下はバルコニーからお手をおふりになる、と相場は決まっておりますんで。」

と、主人が言うと義人は心の中で

（男は女に尻尾をふるってか？）

なんてことを考えていた。

「使うのは私じゃないわ。使い魔よ。剣の事なんかわからないから、適当に選んでちょうだい。」

ルイズがそう言うと主人は店の奥から1本の剣を剣を持ってきた。

「そっぴや、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たせるの

が流行っておりましてね。その際お選びになるのがこのレイピアで  
さ。」

長さは１メートルほどの細身の剣。なるほど、貴族に似合いの綺麗  
な剣だった。

「貴族の間で下僕に剣を持たせるのが流行ってる？」

ルイズは剣よりもそっちの方が気になった。

「へえ、なんでも土くれのフーケとかいうメイジの盗賊が貴族の宝  
を盗みまくってるって噂で。貴族の方々は恐れて、下僕にも剣を持  
たせてる始末で。へえ。」

ルイズはふぐんと言つとじろじろと剣を見始めた。すると、義人は

「この剣じゃ簡単に折れちまいそうだな。もっと大きいのは無いの  
か？」

と言った。

「お言葉ですが、剣と使い手には相性つてもんがございまして……。  
」

「問題ねえよ、とりあえず見せてくれ。」

義人がそう言つと主人は立派な大剣を持ってきた。

「これなんかいかがでしょう？店一番の業物でさあ。」

ルイズはこれでいいか、と思っていると

「何せこいつを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シユペー卿。ここにその名前が刻まれているでしょう?」

と、主人が言い、ルイズが値段を聞こうとすると

「いや、そりゃ戦闘じゃ使い物にならねえな。他のにしてくれ。」

と、義人は言った。主人はどういうことかと尋ねると

「装飾が多すぎる。そりゃ儀礼用だろ? 儀礼用の剣が戦闘で役に立つわけがねえ。」

と、バツサリ切り捨てた。

すると義人の後ろから突然声がした。

「わかってるじゃねえか小僧。だが、その体じゃどう見ても剣なんか振れそうにねえな。家に帰って棒つきれでも振ってな!」

普段の義人ならカチンと来ただろうが、今の義人は喜んでいた。

この声は間違いなく『アレ』だと。

そして声がした方を振り向くと一本のボロ剣があった。

「今のはこの剣が?」

「それってもしかして、『インテリジェンスソード』?」

「やい！デル公！お客様に失礼なこと言うんじゃないねえ！」

主人はそう怒鳴りつける。

そう、サイトの相棒であった『デルフリンガー』だ。

義人は黙って近づき、デルフリンガーを握る。

「いきなり何しやがんだ小僧！……おでれーた。おめえ『使い手』か。よし、てめえ！オレを買え！」

「ああ、買うよ。」

初めからそのつもりだったしな…と、義人は心の中で呟く。

「ルイズ。これ、買ってくれ。」

するとルイズは嫌そうな顔をしながら

「そんなのにするの？もつと綺麗で喋らない剣にしなさいよ。」

と、嫌そうな声を上げる。

「いや、こいつが気に入ったんだ。それに、見た目ほど悪い剣じゃなさそうだ。」

「しょうがないわね…。あれおいくら？」

「あれでしたら新金貨百で結構です。」

「随分安いのね…」

「うちとしては厄介払いみたいなもんですので。」

そしてルイズは金貨を百払い店を出て行った。

それを見ていたキュルケがすぐに店に入り剣が欲しいというと言うと、店主は先ほどの大剣を新金貨4,000で売ろうとしたが、キュルケの色気に負け1000で売ってしまい、その日の晩涙で枕を濡らすハメになった。



## 第八話（後書き）

やっとタバサ登場！

作者はタバサが大好きです！

次話からフーケが登場します

## 第九話（前書き）

我らがフーケのご登場です！

そして初の予約投稿。

ちゃんと出来てるかな…？

## 第九話

「それで？何でアンタが私の部屋にいるのよ？」

不機嫌なのを隠そうともせず、ルイズはキュルケを睨みつけながら言う。

ルイズとトリスタニアに行った日の夜。突然キュルケと青い髪の少女がルイズの部屋へとやってきた。

「あなたに用は無いわ。私は義人に用があつてきたのよ。」

キュルケはルイズの視線をなんとも思つてないような風に言う。

「オレに？オレに何の用なんだ？」

義人はわかつていた。キュルケが剣を渡そうとやってきたこと、そしてそのまま決闘騒ぎになり中庭に出るとフリーケが現れ、破壊の杖を持ち去ることを。

（ここは原作通りに進めた方がいいな。けどキュルケが持つてきた剣はさつき武器屋で使い物にならないって言った剣だ。原作通りに進めるなら、中庭で決闘してもらわねえと困るんだが……どうするか。）

「あなた剣士でしょう？だから街に行つたときに『たまたま』見かけた武器屋で買ってきたのよ。それをあなたに渡そうと思つてね。」  
そう言つて見せてきたのは、やはりさっきの剣だ。

「どう？その剣を鍛えたのはゲルマニアの錬金魔術師、スーパー卿だそうよ？」

その時ルイズが口を開いた。

「なにがたまたまよ。どうせ後を付けてきたんでしょ？それにその剣、さっき義人が戦闘じゃ役に立たないつて言つた剣じゃない。」

それを聞いたキュルケは、えっ！？と驚いた顔をした。

「あ、ああ。裝飾が多いからな。多分儀礼用の剣だろうから、戦闘には使えねえだろうな。」

そんなぐとキュルケはがっくり頂垂れるが

「まあ、あくまで戦闘ではの話だけどな。飾つたりする分にはかなり上等な剣だろうよ。」

と、フォローするとルイズは義人を睨みつける。

「なにアンタ。その剣貰おつて言つなの？」

「いや、わざわざ買ってきてくれたんなら貰わないと失礼じゃねえかと……」

「冗談じゃないわ！ゲルマニア、特にツエルプストーの者からなくて、豆粒一つだって恵んでもらいたくないわよ！」

ルイズの実家であるヴァリエール家はツエルプストー家と長きにわたる因縁がある。

だから余計に気に入らないのだろう。

「でも義人は貰ってくれるって言ってるじゃない。それとも、私の方が高い剣を買ってあげたものだから嫉妬してるの？」

キュルケはそう言うと義人に熱い視線を送りながら

「女はゲルマニアに限るわよ？トリステインの女なんて、ルイズみたいに嫉妬深くてヒステリーで、プライドばかり高くってどうしようもないんだから。」

と、誘惑してきた。ルイズはキュルケを睨みつける。

「あら、ホントの事じゃない」

「へ、へんだ！あんななかただの色ボケじゃない！ゲルマニアで男を漁りすぎてトリステインに留学してきたんじゃないの？」

ルイズは相当頭にきてるんだろう、声が少し震えている。

「言ってくれるじゃない。」

キュルケの表情が変わった。

「あら、ホントの事でしょう。」

ルイズがそう言った瞬間、二人は同時に杖に手をかけた……が、それよりも早くタバサが杖を振ってつむじ風を起こし、二人の杖を吹き飛ばした。

「室内。」

タバサは一言そう言うと、本を読み始める。

「なによこの子？」

ルイズが忌々しげに言うと、キュルケが答える。

「私の友達よ。」

「なんでアンタの友達がここにいるわけ？」

キュルケはルイズを睨みながら別にいいでしょ？という。

二人の熱は全く冷めていなかった。そこで義人は声をかける。

「なあ、だったら二人で勝負して決めればいいじゃねえか。」

すると二人は義人の方を向き「アンタ（あなた）の事でしょ……！」と怒鳴るが

「オレは貰いたいが、ご主人様が気に入らないらしいからな。だったら二人が勝負して、勝った方の意見を通すつてのでいいんじゃないか？」

「そうね、それでいいわ。それじゃ、勝負の方法はメイジらしく魔法で勝負っていうのはどう?」

キュルケは勝ち誇ったように言う。

ルイズは少し悔しそうな顔をしたがすぐに了承した。

義人はなんとか誘導できたことに内心、安堵のため息を吐いていた。

「だったら中庭に出ようぜ。ここじゃ危ないからな。」

そして四人は部屋から出ていった。

「ちっ、さすが魔法学院の宝物庫。物理攻撃に弱いつて言ったって、

こんなに壁が厚くちゃどうしようもないじゃないか！」

魔法学院の本当の壁に垂直に立っている、黒いローブを纏った女性。最近世間を騒がせている『土くれのフーケ』である。

「やっとここまで来たってのに……かといって、そう簡単に諦めるわけには行かないね。……ん？」

フーケ誰かが近づいてくる気配を感じてトンと壁を蹴り、近くの茂みに身を隠した。

「じゃあ勝負の方法は、屋上からロープで吊るした剣を落とした方の勝ちってことでいいよな？」

吊るしてある場所はもちろん、魔法学院の本塔。剣は義人が投影で作った剣である。

モデルは先ほど武器屋でたまたま見かけた物なので、鈍らもいところだが、わざわざ宝具を作り出す必要もないだろうと考えての事だ。

( (確かここでフーケが宝物庫から『破壊の杖』を盗み出すんだよな。ここで捕まえる気はないが、気合い入れておくとするか) )

そして勝負の結果は原作通り、ルイズの魔法は塔の壁に当たり、キユルケがロープを焼き切ることで勝利した。

義人はそろそろか…と思いつつ、いつでも投影できるようになっている。

茂みに隠れていたフーケは驚愕した。

トライアングルである自分でも破壊できないと思っていた壁にヒビが入っていたのだ。

（信じられないけど、これはチャンスだねえ）

フーケはすぐさまルーンを唱え、巨大なゴーレムを作りあげた。

「きゃあああああ!!!!!!」

キュルケは背後に現れた物に驚き、悲鳴を上げながら逃げていった。

( (来たか!) )

義人はすぐに投影をする。投影した宝具の数は30。

「ルイズ!先に逃げろ!」

そう叫ぶと同時に投影した宝具をゴーレムに向かって放つ。

( (ちっ、やっぱり再生するか。となると、一気にふっ飛ばすしかないわけだ。) )

そしてゴーレムは本塔の壁を破壊し、フーケが中から何かを持ち出した。

( (あれが破壊の杖か。とりあえず、ある程度距離が離れたら吹き

飛ばすか。一緒にフーケが吹っ飛ばないといいんだが……）

そして宝具を投影し放ちながらゴーレムが離れていくのを確認する

（（ネギまの魔法を使ってみるか。））

そして義人は呪文を詠唱し始める。

「来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の風！！！」

右拳を構え、そこに魔法を装填し、正拳付きのように放つ。

「雷の暴風！！！！！！！」

『雷の暴風』はゴーレムに当たると、それを一気に吹き飛ばした。いや、もはや消滅したと言ってもいいほどに跡形もなく消し飛んでいる。

それを見ていたルイズ、キュルケ、タバサは見たこともない、あまりにも強力な魔法に呆然としていた。

撃った本人である義人でさえも啞然としている。

（（こんなに威力あったのかよ……。ネギの雷の暴風の5倍はデカかったぞ……。こりゃ千の雷なんか撃ったらとんでもないことになるな……））

義人は消し飛んだゴーレムの方を見ながら、よほどの事が無い限り使わないようにしようと心に決めた。

「あ、フーケ生きてっかな……?……」



## 第九話（後書き）

はい！フーケのゴーレム吹き飛びました（笑

ちなみに義人が言ってるネギの雷の暴風の規模は、修学旅行でスクナに撃つたものを基準にしています。

あれの5倍ですwww

はたしてフーケは生きているでしょうか！？

ギーシュとの仲直りイベントってどのタイミングで書けばいいでしょう…？

原作をちらつと読み返したら無かったんですね…

あったと思ったんだけどなあ…。

いつそ書かないで自然と仲直りしました！的な方がいいんでしょうか…？

感想&指摘お待ちしております！

第十話（前書き）

何とか投稿…

## 第十話

「それで、現場を見ていたのはこの3人なのかね？」

オスマンが尋ねた。

フーケに学院を襲撃された次の日の朝。ルイズ達は宝物庫にいた。宝物庫にはコルベール他、学院の教師たちが集まっている。

「ええ、この3人です。」

コルベールは前に進み出て、後ろにいた3人を指さした。

正確に言えばルイズ、タバサ、キュルケ、義人の4人なのだが

( (平民だからなのか、それとも使い魔だからなのか…。どっちにしろ人間扱いされてねぇってことか?) )

義人は数に入っていないかった。義人は自分は話に参加する必要もないだろうと思い、壁に背中を預けて座り込む。

「ふむ……、君たちか。詳しく説明したまえ。」

ルイズが前に出て見たままを述べる。

「えっと、いきなり大きなゴーレムが現れて、ここの壁を壊したん

です。肩に乗っていた黒いメイジが、恐らく『破壊の杖』だと思いますが、盗み出したあと、またゴーレムの肩に乗って城壁の方に向かって行っただんですが……。」

ルイズはちらつと義人の方を見る。

「ふむ、それでゴーレムはどうしたのかね？」

ルイズは少し言いづらそうに

「えっと……私の使い魔が吹き飛ばしちゃいました……。」

その場にいた教師たちは「…は？」と口を開けてポカーンとした。

「えっと、吹き飛ばしたというのは……？」

コルベールが尋ねると

「…そのままの意味です。見たこともない魔法を使って一瞬で……。」

すると教師の一人が

「まさか…先住魔法か!？」

と言って、義人に杖を向ける。

義人はため息を吐きながら目を閉じて答えた。

「先住魔法ってのがなんだか知らねえが、オレが使ったのはオレの故郷の魔法だ。オレはハルケギニア出身じゃないんでな。それより

……」

義人の目がすう…つとゆつくり開かれ

「杖を下せよ。お前も吹き飛ばか…？」

義人が教師を睨みつけながら魔力を解放すると、宝物庫に突風が吹き荒れた。

「これは魔法でも何でもねえ。ただ魔力を放出しているだけだ。これだけの魔力で魔法を使えば、ゴーレムくらい吹き飛ばせんだろ？」

そして義人は再び目を閉じて魔力を抑える。義人に杖を向けていた教師は、杖を下ろす。

その場にいた義人以外全員が冷や汗をかいていた。

「……ま、まあ吹き飛ばしたかとはともかく、フーケの手掛かりなどは残っていなかったのかの？」

「そのあと、あの場を確認しましたが、何も残っていませんでした…。」

「ふうむ…手掛かりはなしか。」

オスマンはどうしたものかと思案していると、ふとあることに気づき、コルベールに尋ねる。

「そついえば、ミス・ロングビルはどうしたのかね？」

「それが…朝から姿が見えませんが」

「この非常時に、一体どこに行ったのじゃ。」

噂をすればなんとやら、ちょうどロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル！一体どこに行っていたのですか！？事件ですぞ！」

コルベールは興奮した様子でまくし立てる。しかしロングビルは落ち着いた態度でオスマンに告げる。

「申し訳ありません。朝からそのことで調査をしておりました。」

「仕事が早い。それで、どうじゃった？」

「はい、フーケの居所がわかりました。ここから徒歩で半日、馬で4時間ほどのところにある村で、フーケの目撃情報がありました。住民の話では、黒いローブを来た人物が、近くの森の中にある小屋に最近出入りしているようで、昨晚もその人物が小屋に入っているのを見た。」

すると教師たちから感嘆の声が漏れる。だが義人は

（「こいつら教師のくせに気づいてないのか？ロングビルは『朝から調査していた』って言ったんだぞ？どう考えたって戻ってくるの早すぎるだろ。往復で8時間。朝の4時に出たって、戻ってくるのは早くても昼時じゃねえか。聞き込みの時間を含めればもっとかかるはずだ。」）

義人は教師たちがなぜ気付かないのかと呆れていた。

「それでは、すぐ王宮に報告しましょう！」

コルベールがそう言う。オスマン目を剥いて怒鳴った。

「バカ者！そんなことをしてる間にフーケに逃げられてしまっわ！それに我らは貴族じゃ！身にかかる火の粉を自身で払えんでどうする！！」

ロングビルがその答えを待っていたとばかりに微笑んだのを、義人は見逃さなかった。

（誰か気づけよバカ共が……。）

義人は頭を抱えなくなった。

「これより捜索隊を編成する！我こそはと思うものは杖を掲げよ！」  
オスマンがそういうと、しん…とした空気が流れる。誰もそんな危険なことはしたくないのだ。

「どうした？おらんのか？フーケを捕えて名を上げようとする貴族は誰もおらんのか？」

オスマンは情けなくなった。これだけメイジがいて誰も名乗りを上げない。いつからこんな腑抜けばかりになってしまったのかと…。

そう思っていると、すっと杖を掲げた人物がいた。

「ミス・ヴァリエール！あなたは生徒ではありませんか！ここは教師たちに任せて…」

「誰も…誰も杖を掲げないじゃないですか！！」

この学院の女教師であるシュヴルーズが驚いた声を上げるが、ルイズは力強い目をして言い放った。

すると、キュルケも杖を掲げる。

「ミス・ツエルプストー！あなたまで！？」

キュルケはつまらなそうに

「ヴァリエールには負けられませんもの。」

という。そしてキュルケが杖を掲げたのを見ると、タバサも杖を掲げた。

「タバサ、あなたはいいのよ？関係ないんだから。」

タバサは短く答える。

「心配。」

ルイズは唇をかみしめて礼を言う。

「……ありがとう。」

オスマンは彼女らを見て笑った。

「では、彼女らに行ってもらおうかの。」

「オールド・オスマン。私は反対です！生徒をそんな危険な場所に…」

「では君が行くかね？ミセス・シュヴルーズ。」

「いえ、私は体調がすぐれませんので…」

そこで下がらなければ素晴らしい教師なのだ…。

「彼女らは敵を見ている。そのうえ、ミス・タバサは若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いておる。」

キュルケが本当なの？と聞くと、タバサは小さくうなずいた。

「そしてミス・ツエルプストーもまた、非常に優秀な火のメイジだと聞いておる。」

キュルケは自慢げに髪をかき上げた。

「ミス・ヴァリエールは…優秀なメイジを多く輩出した名家の息女で…その…将来有望なメイジだと聞いておるが？」

オスマンが言い淀んだ瞬間、義人は吹き出しそうになったが、あとで何を言われるかわからなかったので必死にこらえた。

「そしてその使い魔は平民でありながら、あのグラモン元帥息子に決闘で勝利し、さらにフーケのゴーレムを倒しておる。」

そこでコルベールは興奮したように口を開くが

「そうですね！何せ彼はあのガンだ「せいやあ！！！！」「ぐぼお！？」

オスマンがローリング・ソバットを放ち黙らせる。

なんとも元気な老人である。

そしてオスマンは威厳のある声で4人に言った。

「とにかく、搜索は彼女たち任せ。魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する。」

ルイズ、キュルケ、タバサの三人は直立して「杖にかけて！」  
「と唱和し、スカートの裾をつまんで恭しく礼をする。」

義人も立ち上がり、オスマンに軽く頭を下げた。

「こちらで馬車を用意する。現地に着くまで魔法は温存したまえ。  
ミス・ロングビル、彼女たちを手伝ってやってくれ。」

「元より、そのつもりですわ。」

そう言って、ロングビルはオスマンに頭を下げた。

そして4人はロングビルを案内役に、出発した。



## 第十話（後書き）

時間の関係上、ここで切ります……

色々端折ったので、時間があるとき修正するかも……

フーケ戦は次話で！

明日投稿できると思っています。

感想＆指摘お待ちしております！

## 第十一話（前書き）

遅くなつてすみませんでした！  
言い訳は後書きにて……；

## 第十一話

5人は深い森の入口にいた。

時刻はすでに昼。この森の奥にフーケがいると思われる小屋があった。

「ここからは徒歩で行きましょう。」

ロングビルはそう言い、5人は馬車を降りて森の中へと入っていく。昼間だと言うのに薄暗く、気味が悪い

( ) (もうすぐか…。でも破壊の杖はどうするかな?) ( )

義人なら破壊の杖を使わなくてもゴーレムを破壊できる。

( ) (使わずにオスマンに返した方がいいのか? だけど、一度ルイズ達にあつちの世界の兵器を見せた方がいいかもしれないし…。) ( )

義人がそんなことを考えているうちに、5人は開けた場所に出た。

そこにポツンとボロボロの小屋が建っている。

恐らくあそこなのだろう…。

5人は小屋の中から見えないように茂みの中に身を潜めて、小屋を見る。

「わたくしの聞いた情報だと、どうやらあの中にいるようです。」

ロングビルは小屋を指さした。

「んじゃ、オレが中の様子見てくるわ。」

義人はゆっくりと小屋に近づいていき

「わたくしは少し辺りを見てきますわ。小屋の外に出ている可能性もありますし。」

ロングビルは周囲の偵察に出た。

( (原作だと、畏も無しに小屋の中に置いてあったんだよな。確かM72ロケットランチャーだったか?) )

小屋の前に着き軽く見まわすが、何も無かったのでみんなを呼び中へと入った。

ルイズを見張りに置き、義人、キュルケ、タバサで中を搜索する。

すると探し始めてすぐにタバサが破壊の杖を発見した。

キュルケは「あっけないわね〜」などと呟いているが……

「きゃあああああああ!!!!!!!!!」

外からルイズの悲鳴が聞こえた途端、小屋の屋根が壊され、ゴーレムが姿を現した。

「ゴーレム!?!」

キュルケとタバサはすぐに呪文を詠唱し、杖を振るが、ゴーレムはビクともしなかった。

「無理よこんなの!」

「撤退。」

タバサとキュルケは一目散に逃げ出すが、ルイズはゴーレムの前に立ちふさがって呪文を詠唱する。

だがゴーレムには小さな窪みができただけで、まるで効いていない。

「お前何やってんだ!!」

義人はルイズに向かって叫ぶ。

「こいつを倒せば誰も私をゼロだなんて呼ばなくなるわ!それに、魔法を使える者を貴族と呼ぶんじゃない!」

ルイズはまた呪文を詠唱し

「敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶのよ!!」

ゴーレムに杖を振る。

しかし、やはりゴーレムには効かない。ゴーレムはそのまま足を振り上げルイズを踏みつぶそうとする。

義人は瞬動を使い、間一髪のところルイズを抱きかかえゴーレムから距離を置く。

そして義人はゆっくりと、重く、低い声でルイズに言った。

「ふざけんなよ。敵に後ろを見せない?その心意気は立派なもんだ。けどな、死んじまったら意味ねえだろうがっ!」

ルイズの目から涙が流れた。

「だって…いつも…みんなからバカにされて…悔しくて…」

義人はルイズの頭を撫でながらタバサを呼んだ。

「タバサ、ルイズの事頼めるか？」

タバサはコクリと頷いた。

「あなたはどつするの？」

義人はゴーレムの方を向きながら

「使い魔の功績って主人の物になるだろ？オレがあいつを倒せば、ルイズをバカにする奴なんかいなくなるじゃねえか。」

と、言った。

義人は笑っていた。それは獲物を見つけたような捕食者の笑みだった。

タバサはシルフィードを呼び、ルイズとキュルケを乗せ空に上がった。

「タバサ！義人を助けて！」

タバサはふるふると首を横に振り

「私たちが近づけば彼の邪魔になる。」

「そうよ。義人の決闘見たでしょ？それに昨日の魔法も。私たちがや足手まといにしかないわ。」

タバサとキュルケはそう言う。

実際彼女たちではゴーレムには敵わないし、義人のフォローをするにも力不足。

今は見ている事しか、彼女たちにできることは無かった。

「義人……。」

「さあて。泥人形には悪いが、主人の名誉のためにぶっ潰させてもらっぜ？」

そう言うと義人は、ネギが使用していた身体強化の呪文『戦いの歌』

を発動する。

そして二本の剣を投影し、ゴーレムに向かって駆け出した。

『Fate/stay night』でアーチャーが使用していた、二本一対の陰陽の夫婦剣『干将・莫耶』である。

義人はゴーレムが右足を振り上げ、踏みつぶそうとした瞬間に瞬動でゴーレムの足もとに入り込み、軸になっていた左足に向かって一気に剣を振る。

一瞬で何度も剣を振るい、左足をバラバラにしてゴーレムを転倒させる。

『戦いの歌』にガンダールブのルーンの効果。

戦いを見守っていた三人には剣を振るった瞬間が全く見えなかった。

しかし、ゴーレムの足はすぐに再生し、立ち上がって来る。

「やっぱ一気にぶっ飛ばさないとダメだな。でもなあ……」

昨夜ゴーレムに雷の暴風を放つことができたのは、あれは逃げるゴーレムに後ろから放ったからである。

正面、しかも義人を狙っている以上、呪文の詠唱などしていたら潰されてしまう。

だが干将・莫耶で一気に倒すのは不可能。

ならば……と、義人は干将・莫耶を消して新たに別の武器を投影する。

投影したのは弓と『偽・螺旋剣（カラドボルグ？）』だ。

義人は瞬動でゴーレムの背後に距離を置いて回り込み、弓を構え魔力を流し込む。

10秒程魔力を流し込みカラドボルグを放つ。

「つらあ!!!!!!!!!!」

カラドボルグはゴーレムの上半身を一気に吹き飛ばし、義人は弓を下ろした。

ゴーレムはそのままバラバラと崩れ落ちて、ただの土の山になった。

義人は「あとはフーケを捕まえるだけだな」と、思いながらルイズ達の方を見るが、その瞬間目を見開いた。

義人がカラドボルグを放ったゴーレムは確かに吹き飛び、原作のようには崩れていった。

しかし、思い出して欲しい。なぜ原作でフーケはゴーレムをサイトと戦わせたのか？

それは破壊の杖の使い方を知るためだ。

義人は破壊の杖を使っていない。

それでは意味が無いのだ。ここまで義人たちを連れてきた意味が。

ルイズ達の方に新たにゴーレムが現れ、拳を振り上げていた。

義人は何も考えられなかった。無意識に右手と左手を合わせ、ルイズ達の方へ瞬動で駆けだす。

なぜあれが発動したのか。それは義人にもわからなかった。

気づいた時には発動していたのだ。

あれは魔法ではなかったはず。なぜ使えたのか。

管理者からのおまけで発動できたのかもしれない。

そしてルイズ達に振り下ろされようとしていた拳を、正面から殴り

つけて拳を破壊し、ゴーレムを転倒させる。

その時の義人の姿は…光を纏っているようだった。

義人が発動したのは

『咸卦法』だった。

（これは…咸卦法か！？咸卦法は気と魔力の合一だ。なんでオレに気を使える！？いや、たとえば気が使えたとしても、そんな簡単な技法じゃなかったはずだろ！）

義人が管理者に頼んだのは、ネギまの魔法が使えるようにしてくれ  
というものだ。

咸卦法が『魔法』だったなら可能だろうが、これはどちらかという

と『技』だ。

義人は混乱するが、管理者が『魔法』だけでなく技も使えるようにしてくれたのかもしれない。

そう考えることで一旦思考をやめ、ルイズ達に声をかける。

「大丈夫だったか？悪いな、まさか二体目が出てくるとは思わなかった。」

ルイズ達は驚いたような顔をしながら「大丈夫よ。」と伝える。

（破壊の杖を使わないと、こいつを倒しても三体目が出てくる可能性がある。やっぱり使うしかねえか。）

「ルイズ、破壊の杖を貸してくれ。」

そう言って義人はルイズから破壊の杖を受け取り、起き上がるようにしているゴーレムに向かって構える。

そしてゴーレムが立ち上がった瞬間に

「爆薬でも食つとけよ。」

破壊の杖のトリガーを押した。

シュポツと気の抜けたような音を立てて飛んで行ったロケット状の物がゴーレムに命中し

ドゴオオオ!!!!!!

と、爆音を立ててゴーレムを粉碎した。

ルイズ達はその破壊力に呆然としている。

義人はふう…と息を吐き地上に降りると、シルフィードも降りてきて、ルイズ達は義人に駆け寄った。

「あ、あんた何やったのよ…？」

ルイズは驚いた顔をしながら破壊の杖を見つめている。

「これはオレの国の兵器なんだよ。確かM72ロケットランチャーだったか？まあ銃が進化して、弾が爆発するようになった物だと思えばいい。」

そこでタバサが呟いた。

「フーケはどこ？」

「まだ近くにいないかもしれないわね。」

すると茂みの中からロングビルが出てきた。

「ミス・ロングビル！？今までどこにいたんですか？」

ルイズが尋ねる。

「申し訳ありません。フーケを見つけたので追いかけたのですが、取り逃がしてしまって…。急いで戻ってきたところなんです。」

「でも破壊の杖は取り返したんだし、とりあえずいいんじゃないかしらっ。」

キュルケがほっとした声で言うと、ロングビルはルイズに近づいて

ルイズの首に腕を回し、頭に杖を向け

ようとしたが、義人に腕を掴まれた。

「オレの主人に何するつもりだ？フーケさんよ。」

そう言うとロングビルを森の中へ投げ飛ばした。

「ちょっと義人！？ミス・ロングビルに何を！」

「ロングビルじゃなくてフーケなんだよアイツは。事情は後で説明するから、シルフィードに乗って空にいる。」

そう言うと義人も森の中へと入っていく。

義人にかなりの距離を投げ飛ばされたフーケは

「クツ、なんて力だい。死ぬかと思ったじゃないか…。」

木を支えに何とか立ち上がっていた。

「破壊の杖は惜しいけど、ここは逃げないと殺されちまうね…。」

そしてフーケは逃げようと後ろを振り向くと

「よお。」

すでに義人が回り込んでいた。

フーケはすぐに杖を構えようとするも、それよりも早く杖を蹴り飛

ばされてしまう。

ここまでか、と諦めかけたフーケに義人は

「なあ、オレに協力しねえか？」

捕まるわけいかねえんだろ？ティファニアのために。」

フーケは驚愕した。なんでこの男が知っているんだと。

「勘違いすんなよ？別に手を出す気はねえ。ハーフエルフって言うても、ハルケギニア出身じゃねえオレにはどうでもいいからな。」

「…なんのことだい？」

「ここまでバレててまだとぼけるか。アルビオンのウェストウッド村にいるんだろ？子供たちと一緒に。」

「……。」

フーケは黙るしかなかった。

逃げようにも、義人から逃げられるだなんて思っていない。殺そうにも杖は蹴り飛ばされてしまった。

今フーケに出来るのは黙ることだけだった。

「オレはアンタの腕を買ってるんだ。協力してくれるなら、対価としてティファニアの事助けてやるよ。」

助ける？見ず知らずのハーフエルフを？

「さっきも言ったが、オレにとってハーフエルフかどうかなんて関係ねえ。それにあんたもさ、ティファニアに外の世界を見て欲しい

と思つてんだろ？それを叶えてやるよ。まあ、今すぐつてわけには  
いかねえけど。」

もう黙つてても意味は無いと思つたのか、フーケは口を開いた。

「…方法は？」

「オレの世界には認識阻害の魔法がある。それをティファニアの耳  
にかけることで、人間と同じように見えるようにすればいい。」

「もし解けたらどうするつもりだい？」

「オレが解かない限り解けないし、オレが使つてる魔法とハルケギ  
ニアの魔法は違うせいかな、ディテクト・マジックにも反応しない。  
だから解けることはねえ。」

フーケは少し考えると、溜息を吐きながら了承した。

「……はあ。わかつたよ、アンタに協力してやるさ。それで？あた  
しに何をしろつて言うんだい？」

すると義人はとんでもないことを言い出した。

「さあ？今はまだ決めてねえよ。」

「……はあ！？」

フーケは驚いたような呆れたような…複雑な表情をした。

「今は特にねえよ。ただ、何かあつた時オレの代わりに動いてくれ

る人材が欲しかったただけだ。協力してほしいことがあったら、その時に連絡するぞ。」

「あんたは……。逃げるとは思わないのかい？」

「それはあんたがティファニアを見捨てるってことだぜ？ありえねえだろ。それに、オレから逃げられると思っつか？」

義人は笑ってそう言うが、フーケは頭に手を当てて溜息を吐いた。

「まああんま無茶なことは言わねえよ。とりあえず、どっかの街に着いたら連絡をしてくれ。別の街に移動する時にもな。」

「ああ、わかったよ。」

「んじゃ、すぐに行ってくれ。」

そう言うと義人は詠唱を始める。それを聞いた途端、フーケの顔は青ざめ、杖を拾って一目散に逃げ出した。

『雷の暴風!!!!!!』

フーケが逃げたのと逆の方向に雷の暴風を放ったあと、義人はルイズ達の元へ戻って行った。

義人が森から出てくると、ルイズ達はシルフィードから降りて、義人のところに来る。

「あんた一体どうしたのよ！？昨日ゴーレムに向かって放ったのと同じ魔法使ったでしょ！？」

「ん？ああ…最初はフーケと交渉してたんだよ、大人しく捕まらなかって。最初は話してただけだったんだけど、いきなり杖を抜いて逃げようとしたからな。とっさにぶっ放しちまった。」

とっさにあれを放つって……と、キュルケは口の端をヒクヒクさせながら呟いた。

「フーケは？」

タバサが短く問うと、義人は申し訳なさそうに謝る。

「すまん、逃げられた。完全に油断しちまってた…。」

「ん、まあ破壊の杖は取り戻せたんだし、とりあえず学院に戻りましょう。」

キュルケがそう言くと4人はシルフィードに乗って魔法学院へと帰って行った。

## 第十一話（後書き）

前回の後書きで明日投稿すると言ったのに投稿が遅れて申し訳ありません！！！！

用事があったため出かけていたのが原因の1割。残り9割が作者の文才の無さ故の遅筆でございます……

文才欲しいなあ……

少々用事があり、次話は明日になります。

次話で第一章が終了。

そのあと閑話などをいくつか入れたのち、第二章になります。

感想&指摘お待ちしております！

## 第十二話（前書き）

遅くなった上に短いし駄文。  
ホントに申し訳ないです…

## 第十二話

夕方頃なり、ルイズ達はようやく学院に戻ってきた

破壊の杖を取り戻したルイズ達は、学院長室で今回の事を報告していた。

「まさかのお…あのミス・ロングビルが…」

「フーケだったとは思いませんでしたね…」

オスマンとコルベールに報告をすると二人は大変驚いた。

まさか身内にフーケがいたとは考えてもみなかった。

だがフーケはオスマンが飲み屋でスカウトしたらしい。

しかもその理由がセクハラをしても怒らなかつたからだとか…

このジジイは一度死んだ方がいい。

「そういえば義人。なんでアンタはミス・ロングビルがフーケだつて知ってたのよ？」

ルイズが思い出したように義人に聞くと、全員が義人の方を見た。

「むしろ、何で気付かなかったのかが不思議でしょうがねえんだけど…。ロングビルは朝から調査に向かっていたって言っただろ？ だったらおかしいじゃねえか。馬で4時間かかる距離、往復すれば8時間だ。朝から調査に向かって、どうしてあの時間に戻って来れるんだよ？」

全員がハツとしたような顔をしている。

それでいいのか魔法学院…。

「さらに言うなら、行って帰って来ただけでも早すぎるくらいの時間だ。いつ聞き込みをしたんだ？ 一回聞いただけであの情報を調べ上げたのか？ あんな短時間で。」

フーケの言ってることはかなり穴だらけなのだ。

どうして気づかないんだと思うほどに。

「まあ、それだけじゃ証拠が足りないと思ったが警戒はしてたんだ。だからルイズに手を伸ばそうとした時に、すぐ反応出来たんだよ。」  
なるほど…。と、みんな納得したようだ。

「確かにの…。良く考えればおかしな話じゃったわい。」

「破壊の杖を盗まれたことで動揺しすぎましたかな。まさかこの程度のことに気づけないとは…」

「まあオレも油断したせいでフーケに逃げられちまったしな。人の事あんま言えねえよ。」

「じゃが、破壊の杖は無事に戻ってきた。一件落着じゃ。三人には『シユヴァリエ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。ミス・タバサはシユヴァリエをすでに持つておるので『精霊勲章』の授与を申請したぞ。」

三人の顔がぱあつと輝くが、ルイズがすぐに気付いた。

「…あの、義人には何もありませんでしょうか？」

するとオスマンは難しい顔をしながら

「残念だが、彼は貴族ではない。」

でも、一番頑張ったのは義人なんです！と、ルイズとキュルケが言うが

「いらねえよ。あ、でもちょっと金が欲しいんだよな。」

「義人！？あんた何言い出すのよ！！」

ルイズは驚いたように叫ぶ。

「いや、こつち来てからずっとこの服だからさ。てか、この服しか持ってないんだよ。新しいのが欲しいから、今回の報酬はそれでもいいや。」

「そのくらいで良ければ、ワシの私財から出そう。破壊の杖を取り

戻してもらったのに、これしか出来ないのは申し訳ないがのぉ……。」

「別にいいって。オレにとって今一番問題なのは、服を洗うと着るものが無いってことだしな。」

と、義人は笑いながらそう言う。

「すまんのぉ……。さて、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。予定通り執り行う。今日の主役は君たちじゃ。用意をしてくきなさい。せいぜい、着飾るのじゃぞ。」

そう言われ、4人は学院長室を退室していく。

ちなみに義人が残らなかったのは、ガンダールヴについては知っているので、聞くことが無かったからだ。

そして夜、フリッグの舞踏会が執り行われた。

義人はルイズより先に入り、壁に寄り掛かってワインを飲んでいた。

「相棒よ、パーティなのに参加しねえのか？」

「こーゆうの参加すんの初めてだからな、気まずいんだよ。それに平民が真ん中にいたら良く思わねえ貴族もいるだろ。絡まれても面倒だ。」

そう言つて義人はワインを飲み干す。

「なあ、デルフ。頼みがあんだけどさ。」

「なんだい？」

「オレに剣の使い方教えてくんねえか？」

「十分使えてたじゃねえか。」

「オレはただ早くて力が強いだけだ、それも鍛えたんじゃない魔法でな。だから剣の使い方つてのがわからねんだ。今までは能力でこり押ししてきた。実際、技術なんてもんが無くて、相手に見えない速さで剣が振れれば相手は避けられない。防がれても力で叩き潰せばいい。」

義人は空いたグラスにワインを注ぎながらそう言う。

「間違いじゃあねえな。それだけじゃ勝てねえから技術つてもんが生まれた。けど相棒はそれが出来んだろ？」

「でもこの先、それじゃ通用しない奴が出て来るかも知れねえ。出来る準備はしておくべきだろ？」

「ちげえねえ。よし、任せとけ！そんならいなら教えてやるよ！」

「ああ、頼むぜ。」

そしてまた、ワインを一気に飲み干す。

その時、呼び出しの衛兵がルイズの到着を告げた。

白いドレスを身に纏い、髪を後ろにまとめたルイズが会場に入ってくる。

義人は一瞬ルイズに見惚れた。

すると周りにいた男子達が一気にルイズに群がり、ダンスの申し込みをする。

「今までゼロだなんだバカにしてたのに……。虫のいい連中だな。」

だがルイズはダンスの申し込みを断り、義人の方へ真っ直ぐやってきた。

「楽しんですか？」

「微妙だな。パーティに参加するの初めてだから、雰囲気は飲まれちまっつてな。まあ料理は美味かったよ。」

義人は苦笑いしながら答える。

「そうなの？それじゃあダンスも？」

「経験無しだな。」

「そう…それじゃ、私と踊りましょ。」

そう言っつてルイズは義人に手を差し伸べた。

「いや、経験無いつて言っつたばつかじゃねえか…」

「私に合わせてくれれば大丈夫よ。」

「はあ…しょうがねえな。」

渋々と義人はルイズの手を取り、ホールへ向かう。

「ありがとう。」

ダンスの最中、ルイズはポツリと礼を言った

「何がだよ？」

「フーケのゴーレムから助けてくれたじゃない。」

「オレを使い魔にしたのはルイズだろ。当然の事だよ。」

「そう…。ねえ、帰りたくないの？」

「は？」

「アンタにだって向こうでの生活があったでしょ？家族とか、友達とかに会いたくないの？」

義人は少し黙ると、ふっと笑いながら

「確かに会いたいな。けど、ここも居心地がいいからな。帰りたくないとも思ってるよ。」

「そう…」

するとルイズはまた

「…ありがとう。」

そう呟いた



## 第十二話（後書き）

遅くなり大変申し訳ない…。

イベントの後バイトや学校の試験などで書く時間が無い上に思いつかなかったという…。

結局原作とほぼ変わりませんでした…。

次話予告はしません。

前もその前も守れてないので…。

一応閑話をいくつか挟んで第二章（原作二巻）に行きたいと思いません。

## ギーシュとの仲直り…？（前書き）

前回の投稿から1ヶ月も経ってしまいました。  
お久しぶりでございます。

ギーシュとの仲直り…？

「はあはあ…疲れた…」

舞踏会の次の日、義人は中庭で体作りをしていた。

舞踏会の時デルフに剣を教えくれと頼んだので、さっそく始めていたのだ。

どうもデルフが言うには、まだ剣を振るための土台である体が出来上がってないとのこと。

現代日本から召喚された普通の高校生だった義人にそんな体があるはずもなく、地道に体を鍛えるところから始めていた。

身体強化の魔法を使えば問題は無いのだが、鍛えておいて損は無い。

それにガンダールヴのこともある。

ガンダールヴでも身体能力は上昇していたが、どの程度上昇するのかわからないのだ。

単純にプラスだったら効果は少ないが、自身の身体能力を倍にしたりにしているのなら効果はある。

例えば身体能力を3とし、ガンダールヴを10とした場合3 + 10 = 13になる。体を鍛えて5にしても5 + 10 = 15だ。

だが倍だった場合は3 × 2 = 6だったものが5 × 2 = 10となる。

プラスだった場合での上昇は2だが、2倍だった場合の上昇は4になる。

つまり鍛えればかなり強くなれるということだ。

それもあくまで倍だったらの話で、3倍、4倍の可能性もある。

もし2乗だった時の効果はとてつもない。3 × 3で9だったものが5になったら5 × 5で25にもなるということだ。

まあ、どれであったとしても、効果は見込めるのだ。

それに義人に身体能力の限界は無い。鍛えれば鍛えただけ強くなる。すでにチートなはずなのに、今以上のチート、最早バグとも言っている存在になる可能性があるのだ。

「さて、後は腕立てだけだ。」

そう言って義人は腕立てを始めようとするが、ふと視線を感じた。

辺りを見回すと、木のところから人影が見える。

(何だ？さすがに見られてるとやりづらんだが…)

義人は少し悩むも、とりあえず声をかけてみることにした。

「おい、何見てんだよ？用でもあるのか？」

まるでチンピラだ。どう聞いてもケンカを売ってるようにしか聞こえない。

すると木の陰から覗いていた人物が出てきた。

「なんだ、ギーシュか。どうかしたのか？」

「いやね、君に少し話があるんだ…。」

ギーシュは気まずそうに話し始める。

「まずは…この間はすまなかつたね。」

「…？ああ、決闘の事か。あれならもう謝ってもらったじゃねえか。それより、女の子たちには謝ったのか？」

「もちろん、モンモランシーにもケティにも謝ったよ。ケティには完全に見限られたし、モンモランシーは口もきいてくれないけどね。僕がしたことを考えれば当然だが…。」

「まあしょうがねえわな。それで？わざわざもう一回謝りに来たのか？」

「それもあるがね…。僕は君に、友達になってもらいたいんだ。」

友達…ねえ。そういや、こっちの男友達っていなかったな。

「いいぜ、友達になっても。」

「本当かい!？」

「ああ、こっちで男友達っていなかったしな。」

ギーシュは少し安心したような顔で義人に手を差し出した。

「改めて名乗らせてもらうよ。僕はギーシュ、ギーシュ・ド・グラモン。グラモン伯爵家の四男だ。」

「オレは佐上義人。ロバ・アル・カイリエのメイドだ。」

そう言っただけで義人はギーシュの手を握った。

「ところで、君は何をしているんだい？」

ギーシュと友人になってから30分程、義人は腕立て伏せをやって

いた。

「何って鍛錬ってやつだよ。体鍛えてるだけだ。」

「君はそれ以上強くなってどうするつもりだい？君が決闘の時、手を抜いていたのはわかってる。それでもあれだけ強かった。本気を出したら君に勝てる奴なんかいないんじゃないか？」

確かに、今のままでも大抵のやつには勝てる。この後起こるだろうワールドとの戦いでも、今のままで十分勝てる。

「確かにオレは強いだろうな。でも、オレより強い奴がない訳じゃない。強くなっておいて損は無いぜ。」

「君は一体何と戦うつもりなんだ…。」

ギーシュはため息を吐く。実際ハルケギニアで義人より強い奴はま  
ずいない。だが義人と言うイレギュラーがある以上

( (いないとは限らないんだよな…。 ) )

同じイレギュラーが現れてもおかしくは無い。それがどんなモノとして現れるかはわからないが。

「そういえば、決闘の時に使ったいきなり剣が現れたアレは魔法かい？」

「だな。オレの故郷の魔法で、投影ってやつだ。錬金とは違って、自分の魔力を材料にして剣を作ってる。」

「君が僕の前にいきなり現れたのは？」

「あれは瞬動術ってやつだ。魔法って言うより、魔力を使った技だな。足の裏に魔力を溜めて、地面を蹴る時に一気に放出する。まあ高速移動ってやつかね。」

「なるほど…。やっぱり君はこっちのメイジじゃないね。そんな魔力の使い方、こっちのメイジには考え付かないよ。」

だからダメなんだよ、と言いながら義人は立ち上がる。

「ハッキリ言って、ハルケギニアがオレの故郷と戦争したら確実に負けるぜ。」

するとギーシユは不機嫌そうな顔で何故だい？と尋ねる。

「こっちのメイジは接近戦がほとんど出来ない。オレの故郷じゃ、この瞬動術はある程度の技量をもったメイジならみんな使える。一瞬で近づかれて殴り飛ばされるよ。」

それに、と義人は続ける。

「杖が無いと魔法が使えないってのも不味い。杖を奪われた上に接近戦もできませんじゃ、出来るのは殺されるのを待つだけだ。」

「奪われないようにすればいいんじゃないかい？」

と、反論するも

「なら、オレ相手にそれが出来るのか？」

そう言われてしまえばギーシユも黙るしか無い。確かに出来ないだろ…と。

「それに、あつちにはオレより強いやつだっているぜ？オレに勝てない時点でもう負けは決定だろ…よ。」

ギーシユは驚愕した。あれだけ強かった義人よりさらに上がいるだなんて信じられなかった。

「オレは平均より少し上程度。そうだな…こつちで言えばギリギリトライアングルってとこじゃないか？」

無理だ…。とギーシユは思った。ハルケギニアには義人に勝てるメイジなんているかもわからない。スクウエアの中でも最強クラス。例えば烈風カリンなどならば勝てるかもしれないと思ったが、それでも義人が故郷ではギリギリのトライアングル。なら、普通のトライアングルは？いや、スクウエアに勝てるメイジはハルケギニアに存在するのか？そもそも、義人をトライアングルとした場合のスクウエアの強さが想像もつかない。そんな国を相手に戦争なんかしたら勝ち目は全くないだろう。

「まあ、つまりだ。世界にはオレより強い奴なんかゴロゴロいる。ハルケギニアにそういう奴が紛れてても不思議はない。だからいざつて時のために鍛えてるんだよ。」

ちなみに義人が言ってるのはネギまでの世界観だ。義人にとってのスクウエアと言えば、サウザンドマスターやエヴァンジェリンクラスの強さの事を言っている。

「なんというか…エルフより強い気がするよ。」

ギーシュは苦笑いしながら言うが、義人はエルフ程度と比べるなど笑いながら言ったため頬を引きつらせた。

「さて、オレはそろそろ部屋に戻るぜ。」

「それじゃ僕も戻るとしようか。」

その後二人は雑談をしながら寮まで戻って行った。



「こんなに遅くなったってか？」

いや、正直に言つと…

「おう。」

気晴らしに書いてた東方の小説がすんげー勢いで進んでだね？気づいたらそっちばっか書いてた。

「やっぱお前死刑だ。」

お許しをおおおおおお！？

「ってか、これ以外の小説書いてたっけ？」

気晴らしで書いてただけだから投稿してないよ。

ぶっちゃけ投稿する気もあんま無い。

「ふ〜ん。でも投稿してるのはこっちなんだから、こっち優先で書けよ。」

ホント申し訳ないと思っております…。

遅れてもこの作品は必ず完結させますので見捨てないでください！

「見捨てるも何も待ってた人なんかいないって。」

（泣）

「とりあえず千の雷10発で許してやるよ」

…え？

ちょっと遊んでみたかったんだよ。(前書き)

少し書き方を変えてみました。

こんな感じなのかな…？

ちょっと遊んでみたかったんだよ。

オレは今学院の近くにある山の前にいる。

何でかと言うと、試したい技があるんだ。

せっかく魔法が使えるようになったんだ。真面目なものばかりじゃ無くて、たまには遊びも入れたいだろ？まあ使えたら実戦で使おうと思ってるんだがな。

オレは目を閉じて口から細く息を吐いていく。体から力を抜いて、少しずつ魔力を溜めていく。

周りからは風の音だけが聞こえ、ゆっくりと腕を動かす。そして…

「エターナル……」



でもこの威力は凄いな。これなら十分実戦で使えそうだぞ。

しかも詠唱は無し。ただ体に魔力を溜めてぶっ放したただけだ。

結構ふざけた技だけど使い勝手いいんじゃないやねえかこれ？

オレ魔力無限だから、ひたすらこれやってるだけで勝てる気がしてきた。

いつか実戦で使ってみるか。

てててーてーてーててー 義人は「エターナル・ネギフィーバー」を覚えた！

なんかF の戦闘終了時のBGMが聞こえたが…。

って、なんで戦闘終了なんだよ！？レベルアップとか無かったのか！？

まあいいや。だが遊びが一つだけってのは面白くねえよな。

気合い防御とかやってみてえけど、失敗したらシャレにならない。何かいいのねえかな…。

「…ああ、無いなら作ればいいじゃん。」

どっかのエロゲのハーレム主人公が言ってたな。無いなら作るしかないって。

って言ってもどんなの作ろうか…。

「何をしてるの？」

「ん？」

突然後ろの方から声が聞こえたから振り向くと、タバサがいた。な  
んでこんなところにいるんだ？

「ここで何やってるんだ？」

「それはこっちが聞いたこと。」

…確かにそうだな。

「新しい魔法の開発ってとこだ。」

タバサは「そう。」と言うとこっちをじっ…と見つめてくる。え？  
いや、何しに来たんだこいつ？

「大きな音が聞こえたから見に来た。」

エターナル・ネギファイバーか…。長い。ENFでいいか。

まあ山半分飛ばしたからなあ、それはわかった。でもな？

「なんでこっちを見てるんだ？」

「あなたの魔法に興味がある。」

「魔法」って部分が無ければよかったのにby作者

お前ちよつと黙れ。いや帰れ。

「興味がある…と言われてもな。」

よづするに見せろってことなんだろうけど、今考え中だから見せようも無いんだよな。

ENF？あんなふざけた魔法見せられるわけ無いだろ。てかあれは魔法じゃない。

「ん……どんなのが見たいんだ？」

タバサは顎に手を当てて少し考えるような素振りをする

「あなたは決闘の時、剣を出した。けどゴーレムとの戦闘の時は違う剣を出した。あれは錬金じゃない。転移魔法？それともあの場で作り上げた物？」

投影の事か。確か決闘の時はエクスカリバー。ゴーレムの際は干将・莫耶だったな。一応カラドボルグも作ったが、まあ置いておく。とりあえず…

「これのことか？」

エクスカリバーを出してみる。

タバサはじつ…とエクスカリバーを見た後

「これはどうやって出してるの？」

またその質問か。前にも他のやつにされたよな。

「魔力そのものを材料に作ってるんだよ。純魔力製ってやつか？」

そんな言葉があるかは知らねえ。けど純度100%、魔力以外混じって無いからな。

「そんなこと普通はできない。」

「ハルケギニアのメイジじゃねえんだ。普通じゃ無くて当然だろ？」

そもそも、魔法以前にオレの存在が普通じゃねえからな。

タバサはまた少しエクスカリバーを見た後「戻る。」と言って学院に戻った。

そーいや、タバサのことはどうするかな。

ハッキリ言えば助けたい。オレは人助けなんてガラじゃねえと思うけど、それでも助けてやりたい。

まあオレの頭はそこまで良くないから…名前なんだっけ？ガリアの王の…まあいいや。とりあえず頭がメツチャ良かったのは覚えてる。あいつと頭脳戦やったところで勝負になんかなりやしねえ。オレにできることと言えば…

「戦って潰す。それ以外にねえよな。」

タバサの小さな背中を見送りながら、オレは呟いた。

タバサ side

私はいつも通り部屋で本を読んでいた。

ただどほとんど読み終わっている。そろそろまた本を借りに行こう。そんな事を考えてると、突然爆音が聞こえてきた。

最初はルイズが魔法を暴走させたかと思ったが、音からして学院の裏側。そんなところで魔法を使う理由がわからない。

普段なら別に気にならないが、この時はなんとなく気になった。理由は簡単。ルイズの使い魔だ。

最初に興味を持ったのはギーシュを倒した時。彼は突然その場に剣を作って見せた。あれは錬金じゃない。それに杖を持っていないなんておかしい。そのことを疑問に思いながらも、彼らの決闘を見ていた。

けれど私はさらに驚かされた。あの戦闘能力。とても目で追い切れる速さじゃ無かった。

剣はもちろん、彼の動きすらも全く見えなかった。一瞬でギーシュの目の前まで移動していた。

私は心から恐ろしいと思った。あれほどの速さで接近されたら反応なんかできない。もし彼と戦えば確実に殺される。

私はあの時、ただの使い魔ではなく、未知のメイジとして彼に興味を持った。

次に興味を持ったのはゴーレムとの戦闘の時。

ゴーレムに向かつてはなつた魔法。雷の暴風と言つてたと思う。あれの破壊力は凄まじいどころじゃない。あれを首都になんて撃たれたら、たった一発で国が滅びる可能性もある。

しかも魔法使つた後も彼は普通にしていた。彼の魔力はどれだけあるのだろう。あれだけの魔法だったら魔力の消費もかなりの量になるはずなのに…。

そこで私は思った。彼は私の知らない魔法を使える。それならあの人を治せる方法も持つてるかもしれないと。

だから私は音がした方向に向かった。



ちょっと遊んでみたかったんだよ。(後書き)

タバサの回でした。

エターナル・ネギフィーバーに関してはやってみただけです、ハイ。

ちなみに作者が一番好きなキャラはタバサです。

感想お待ちしております！

## 十三話（前書き）

遅くなりました。

言い訳は後書きの方で…。

とりあえず今回から第2章に入りたいと思います！

久しぶりなので文章が悲惨なことになっておりますが、どうかご容赦を…

## 十三話

さて、舞踏会が終わってから数日経った。

オレは今ルイズの隣で風バカ教師、ギトーの授業を聞いている。

いやホント、こいつ風大好きだね。何が風は最強の系統だ。どんな系統も状況次第じゃ強くも弱くもなるってのを知らないのか。

よくこんなんが教師になれたよな。基準はなんなのかぜひ聞いているたい。

「諸君、今から四系統の中で最強の系統は風であることを証明しよう。ミス・ツエルプストー。」

そう言っただギトーはキュルケに杖を向けた。

「試しに私に向かって魔法を打ってみなさい。ああ、手加減はしなくて構わない。」

するとキュルケはムツとした顔で

「火傷じゃ済みませんわよ?」

キュルケは胸の谷間から杖を抜いてギトーに向かってファイヤーボールを打った。ってかどこから杖出してんだよ……。

だがギトーはキュルケのファイヤーボールに向かって杖を一振りするだけでそれを打ち消し、さらにキュルケも吹き飛ばしたが

「よつと。」

義人が瞬動で落下地点に先回りしてキュルケを受け止めた。ちなみにお姫様だっこの形で。

「大丈夫か？」

「え、ええ。大丈夫よ。ありがとう。」

「やりすぎじゃないか？ギトー先生よ。怪我でもしたらどうする気だ？」

ギトーはつまらなさそうにふんつと鼻を鳴らして

「風が最強であることを証明するためだよ。怪我をしたところで、魔法で治せばいいだろう。」

こいつ何言ってるやがんだ？治るなら生徒に怪我させてもいいと？

キュルケはゲルマニアからの留学生だ。そんなことで留学生に怪我なんかさせれば、最悪国際問題にだってなる。

それ以前に怪我させてもいいって考えを教師が持つてる時点でおかしいだろ。

一回痛い思いさせてやるか……？

「ならギトー先生よ。試しにオレの魔法も食らってみてくれよ。ア  
ンタはスクウエア、キュルケはトライアングルだ。系統の差じゃな  
く、使い手の差だと言われたら風が最強とは言えないだろ?」

ギトーはオレを思いつきり睨みつけてる。怖いねえwww完全にキ  
レちゃってるじゃん。

「いいだろう、来たまえ。」

ギトーが杖を構えたので、オレはキュルケを下ろし、ギトーに魔法  
を打とうとしたが……

「あんた、何勝手なことしてんのよ!!!!!!!!!!!!!!」

ルイズに怒鳴られた。

「いや、ちょっと頭に来たから潰してやろうと思ってな。」

「何言ってるのよ!? あんたの魔法を防げるわけないでしょ!?!」

「そ、そうよ義人。いくらなんでもそれは無理だわ。」

キュルケまで止めに来たし……。お前吹っ飛ばされたんだろうが。

つてか二人の発言でギトーが顔真っ赤にして怒ってるぞ? いいのか、  
あれ?

「大丈夫だよ、ちゃんと手加減すつから」

とりあえず火に油投げ込んでみた。ギトーからブチッって音が聞こ

えたんだが気のせいだよな？気のせいだと思いたい。

「……いい度胸だ。私も随分舐められているようだな。手加減は必要ない。全力で来たまえ！！！！」

あらら、今のでルイズとキュルケとタバサが顔真っ青にしてるわ。まあオレの魔法見たことがある奴はそーなるわな。

全力でやってやるうかと思っただが、それじゃ死んじゃうし、学園が吹き飛んじゃまう。

「お前程度に全力はもったいねえよ。」

火の三矢  
セリエス・イグニス

最初は燃える天空でも撃つてやるうかと思っただが、それは範囲が広すぎるので魔力を大量に注ぎ込んだ火の三矢を撃ち込んだ。  
ウーラニア・フロコーシス

ギターは先ほどのように杖を一振りして風で吹き飛ばそうとするも、ビクともせず、ギターの両横と頭上を抜けて黒板にぶち当たった。

「どうした？風は最強じゃなかったのか？」

ギターは啞然としているが、ルイズ達は呆れたような顔をしていた。

「風が最強？そんなこたねえよ。だったら城壁だって軽く吹っ飛ばせちまうだろうが。この世に最強の系統なんかない。条件次第で強くも弱くもなるんだよ。」

義人がそう言いきって席に戻ろうとした時、ボタン！！と大きな音

をたてて教室の扉が開いた。

入ってきたのは金髪のヅラ？を被った、ギャグとしか思えない格好をしたコルベール。

（「そーいや、この後アンリエッタが来るイベントがあつたっけか？」）

「失礼しますぞ！今日の授業はすべて中止です！……おや、ミスター・ギトー？何を呆けているのですかな？」

ギトーはハツとしたような顔をして何でもありませんと答えた。

「……ところで、ミスター・コルベール。授業が中止とは一体どういふことですか？」

「皆さんにいいお知らせですぞ！」

と、言った瞬間に被っていた金髪のヅラが落ちた。

一瞬、時が止まったかのようにシーン……となったが、タバサが指をさしながら

「滑りやすい。」

と、言った瞬間教室は笑いに包まれた。

そしてアンリエッタが魔法学院に到着した。

「トリスティン王国女王、アンリエッタ姫殿下のおな——り——  
——!!!」

おい、お前ら。最初に出てきたのが鳥ガラだからってあからさまに  
がっかりすんなよ。

その次にアンリエッタが馬車から下りてくると大歓声。マザリーニ  
の扱いに涙が出そうだ。

「なんだ、私の方が美人じゃない。」

隣にいたキュルケがつまらなさそうに言うが、オレはどっこいどっ  
こいだと思うぞ？見た目だけは。

中身に関してはキュルケの方がいいかもしれないけどな。男遊びが  
激しいが、友人のために自ら危険な場所へと向かえるキュルケ。片

や惚れた男のために親友を危険な場所へ送り出すアンリエッタ。

どっちの方がいいかなんて目に見えてるわな。

ルイズはまたもや上の空。アンリエッタとワールド、どっちを見てんだらうな？

つてかキュルケもワールドの事見てるし。悪癖にも限度ってもんがだな……。

そしてタバサは座り込んでいつも通り読書に没頭。

オレも特に興味無かったから、タバサの隣に座ってボーっとしながら今後について考えた。

ワールドの裏切りをどうするか。原作通りならアルビオンに行くことは確定だ。その時ワールドはトリステインを裏切りウエールズを殺す。

オレならウエールズを助けられるかもしれない。だがここでウエールズを助けると原作が一気に崩壊することになる。

元々忘れかけていた原作知識だが、全く無いよりはあった方がいい。

原作が変わることへの不安。だが変えないということは、助ける力がありながら見殺しにすること。

( (オレは……どうすればいいんだらうな？ ) )



## 十三話（後書き）

遅くなつて本当に申し訳ありませんでした。  
続きをどうするか考えてたままズルズルと…。  
第2章に入ったんで頑張つていきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4945t/>

---

退屈な人生をやりなおせ！

2011年11月7日09時01分発行